東大阪市文化財調査報告書　第1冊

山畑古墳群1

1973.3

東大阪市教育委員会

東大阪市教育委員会

はしがき

教育長　益倉　辰次郎

古くから古墳の密集地帯として著名な生駒山地の西ろくを市域にもつ東大阪市は、数多くの古墳の存在が知られています。

中でも、上四条町の山畑古墳群には、今日なお20余基の古墳がのこり、群集墳としての景観を示す唯一のものであります。　この古墳群は、かつては、数十基の古墳群であったといわれていますが、戦後の開墾や石材の搬出、さらに最近における宅地の造成等によって次々と失われて来ました。

この古墳群の調査は、旧枚岡市において精力的に進められ、とくにこわされる古墳については、すべて記録作成のための調査が行なわれて来ました。東大阪市になってから、その成果の上に立ち、古墳群の現状を知るために、昭和44年度に国庫及び府費の補助金を得て分布調査を行ないました。

本市ではさらにこの古墳群の保存と活用をはかるため、将来は史跡公園とする構想をもち、市の総合計画の中にとり入れています。その一環として、この古墳群の中に市立郷土博物館を建設し、昭和47年12月開館しました。敷地内には5基の古墳をとり入れ、野外園として活用していますが、社会教育施設として、また文化財センターとして今後の発展が期待されています。

この冊子は、古墳時代後期の群集墳として、数かずの資料を提供している山畑古墳群の調査成果を、多くの方がたに利用していただくために作成しました。過去十数年にわたる、この古墳群の調査と保存のために協力いただいた関係者各位に改めて御礼申し上げると共に、今後一層のご支援をたまわりますようおねがい申し上げます。

例　　言

1　この報告書は、昭和35年（旧枚岡市）より昭和46年（東大阪市）にわたり、調査を実施した山畑古墳群の各古墳の内、埋葬当時の状態をよく残した古墳の調査結果をまとめた調査報告書第1冊である。

2　調査は、ほとんどの古墳が市費による調査で、旧枚岡市及び東大阪市教育委員会を主体として実施した。山畑25・26・6号墳の調査については、昭和44年、国庫及び府費の補助を受けて実施した。

3　各古墳の調査に協力いただいた調査員は下記の諸氏である。

山畑33・35号墳……水野正好・西谷　正・町田　章・伊藤久嗣
山畑25・26・36号墳……荻田昭次、北野　保
山畑22・38・39・40号墳……原田　修

4　調査には、多くの学生諸君の協力参加を得た。記して感謝の意を表したい。

近畿大学考古学研究会・大阪商業大学考古学研究会・神戸山手女子短期大学歴史研究会・阪南大学考古学研究会・大阪商業大学附属高等学校地歴部・近畿大学附属高等学校地歴部・布施高等学校地歴部・花園高等学校地歴部・勝山高等学校地歴部・旭高等学校地歴部

5　報告書の作成に当たり、十分な整理期間を得られず本書の内容が概報程度にとどまらざるを得なかった。報告書の刊行を切望されていた関係各位に対し、深くおわびいたしたい。

目　　次

I　山畑古墳群の概要

1 山畑古墳群の位置と環境……3

2 山畑古墳群の立地と構成……5

3 古墳の形態と規模……9

II　山畑古墳群の調査

1 調査の経過 ……13

2 各古墳の調査 ……15

A．山畑33号墳の調査……15

B．山畑35号墳の調査……19

C．山畑25号墳の調査……23

D．山畑26号墳の調査……26

E．山畑36号墳の調査……29

F．山畑22号墳の調査……32

G．山畑38・39・40号墳の調査……36

III　埋葬とその遺物 ……41

IV　まとめ……43

挿　図　目　次

第１図　府下の古墳群と山畑古墳群……４
第２図　山畑古墳群分布図……５
第３図　瓢箪山古墳北石室……７
第４図　山畑２号墳墳丘測量図……９
第５図　石室の開口方向……10
第６図　玄室規模比較図……12
第７図　山畑33号墳石室実測図……16
第８図　第２次埋葬の石棺……17
第９図　石棺実測図……17
第10図　山畑35号墳全景……19
第11図　山畑35号墳石室実測図……20
第12図　埋葬復原図……21
第13図　山畑25号墳石室実測図……24
第14図　山畑26号墳の石室……26
第15図　山畑26号墳石室実測図……27
第16図　石室とその構造……28
第17図　埴輪出土状態……29
第18図　山畑36号墳石室実測図……30
第19図　人物埴輪実測図……31
第20図　古墳全景……32
第21図　装飾壺の動物と人物像……33
第22図　子持勾玉……34
第23図　装飾壺……34
第24図　山畑22号墳石室実測図……35
第25図　山畑40号墳の棺台……36
第26図　山畑38号墳石室実測図……37
第27図　山畑39号墳石室実測図……38
第28図　山畑40号墳石室実測図……39
第29図　山畑40号墳の棺台と遺物　……40
第30図　山畑33号墳出土遺物……折込
第31図　山畑35号墳出土遺物……〃
第32図　山畑25号墳出土遺物……〃
第33図　山畑22号墳出土遺物……〃
第34図　山畑36号墳出土遺物……42

図　版　目　次

図版１……山畑33号墳の埋葬状態
図版２……山畑33号墳石室全景
図版３……山畑35号墳石室全景
図版４……山畑35号墳の棺台
図版５……山畑25号墳第１次埋葬
図版６……第４次埋葬の石棺
図版７……山畑26号墳石室全景
図版８……棺台と敷石の状態
図版９……山畑22号墳全景
図版10……西丘石室
図版11……第１次埋葬袖部の土器群
図版12……第２次埋葬
図版13……山畑39号墳全景
図版14……山畑40号墳全景

表　目　次

第１表　山畑古墳群一覧表……８
第２表　石室の形態別分類表……11
第３表　玄室規模分類表……12
第４表　調査一覧表……14
第５表　山畑33号墳の出土遺物……18
第６表　山畑35号墳の出土遺物……22
第７表　山畑25号墳の出土遺物……25
第８表　山畑22号墳の出土遺物……33

Ⅰ　山畑古墳群の概要

1．山畑古墳群の位置と環境

山畑古墳群は、大阪府の東端に南北に連なる生駒山地の西麓に数多く分布する後期群集墳の１つで、現在の東大阪市上四条町～客坊町一帯の扇状地形上に分布している。

大阪府と奈良県を画する生駒山地（最高峰　生駒山－標高642.3ｍ）は、褶曲的隆起運動によって生じた花崗岩・閃緑岩系の岩石によって構成されており、その急な西斜面には、複合扇状地が発達しており、八尾市所在の高安群集墳や本報告の山畑古墳群をはじめとする多くの大小群集墳がこうした地形上に分布している。

生駒山地の北端は、京都府・奈良県側からの河川を集めて淀川が西流し、山地の南端は同じく奈良県側から山地を横断して大阪府側へ出た大和川は、現在の柏原市国分附近で南河内方面からの石川と合流し、宝永年間前は、山地に沿って幾本もの支流に分岐して北流していた。

大阪の中央を南北に連なる上町台地と生駒山地との間は、古代においては、肥よくなデルタ地帯を形成していたものと思われる。

このように、南北の淀川・大和川の両河川に囲まれ、東は生駒山地にはさまれた地域は、文字通り川に挟まれた豊かな土地、つまり河内地方の中心地域であり、当時の生産力を示すように山地の扇状地末端部に沿って各時代の遺跡が濃密に分布している。

また、平野部においても、当時の河川の自然堤防上に弥生時代前期～後期・古墳代前期～中期の集落の進出が多く見られる。

とくに古墳の分布は、河内平野を挟む上町台地及び生駒山地西麓の扇状地形上及び尾根、丘上に見られる。

上町台地には、中期の古墳で前方後円墳の茶臼山古墳・御勝山古墳・帝塚山古墳等があり、古墳時代中期の有力な氏族の存在が目立つ。これらの古墳群の南方８km には著名な大古墳群の百舌鳥古墳群が広大な面積を占めて存在している。

一方平野をへだてた生駒山地の西麓には、北より前方後円墳の忍ヶ岡古墳（四条畷市）・西ノ山古墳・花崗山古墳・心合寺山古墳（八尾市）等、主軸長150～60ｍ前後の前～中期へ続く古墳群及び大型群集墳の高安千塚など多くの古墳群が見られる。

また、大和川が奈良県側から大阪府側へ出た柏原市国分附近には、古代の河内国府が存在した河内の中心地域で、松岳山古墳群や玉手山古墳群等の前期の古墳群や、200基を超える大型群集墳の平尾山千塚・雁多尾畑古墳群、線刻画装飾で知られる高井田横穴古墳群など多くの古墳が集中している。

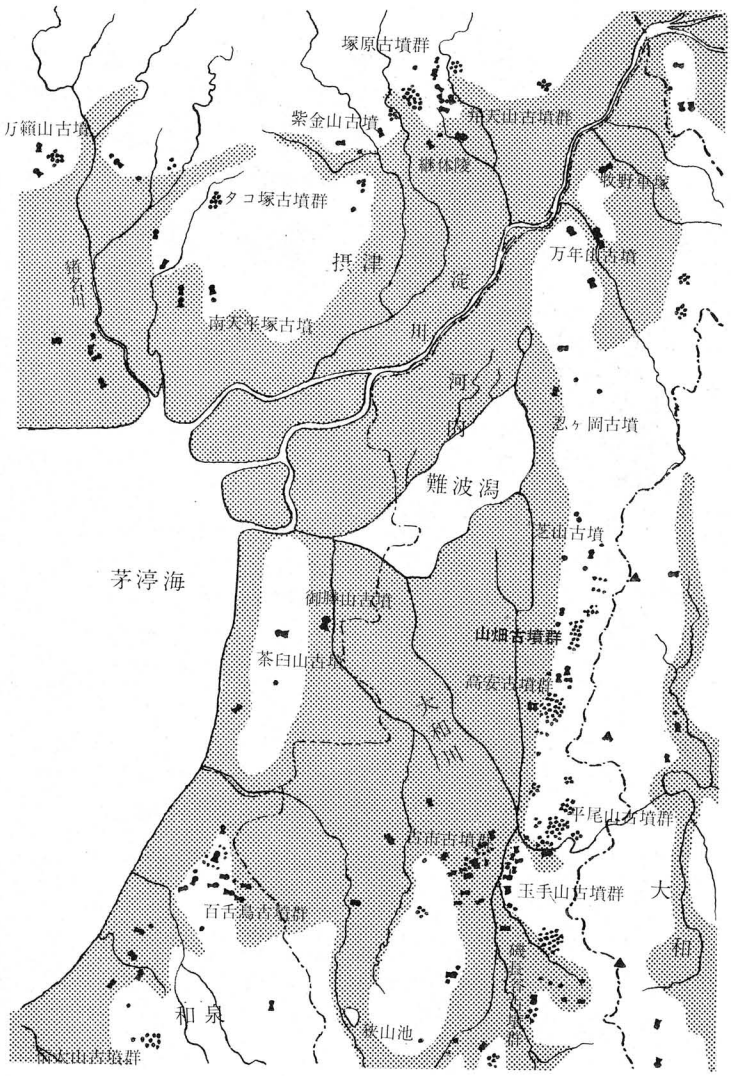
また、南河内地方より北流し、大和川に合流する石川を隔てた羽曳野丘陵北端には、百舌鳥古墳群とならび、応神天皇陵を盟主とする古市古墳群が広がっている。

さらに南の石川流域東岸は、近つ飛鳥で知られる聖徳太子御廟・用明天皇陵等をはじめとする７世紀の磯長古墳群や、一須賀古墳群など群集墳も大型のものが見られる。

この様に、生駒山地西麓から大和川をこえ、金剛山地西麓にかけて分布する古墳の総数は、約三千基に近いものと察せられる。

この様な、河内地方の古墳の分布の中で、東大阪市上四条町一帯の扇状地一帯に分布する山畑古墳群は、山地西麓の大小群集墳の内、総数70～80基程度の古墳から構成される中規模群集墳の最北端にあたる。このことは、当時における群集墳の存在する地域（河内国河内郡）の生産地域の面積・条件等の劣悪さを示すものとして興味深い。

第１図　府下の古墳群と山畑古墳群

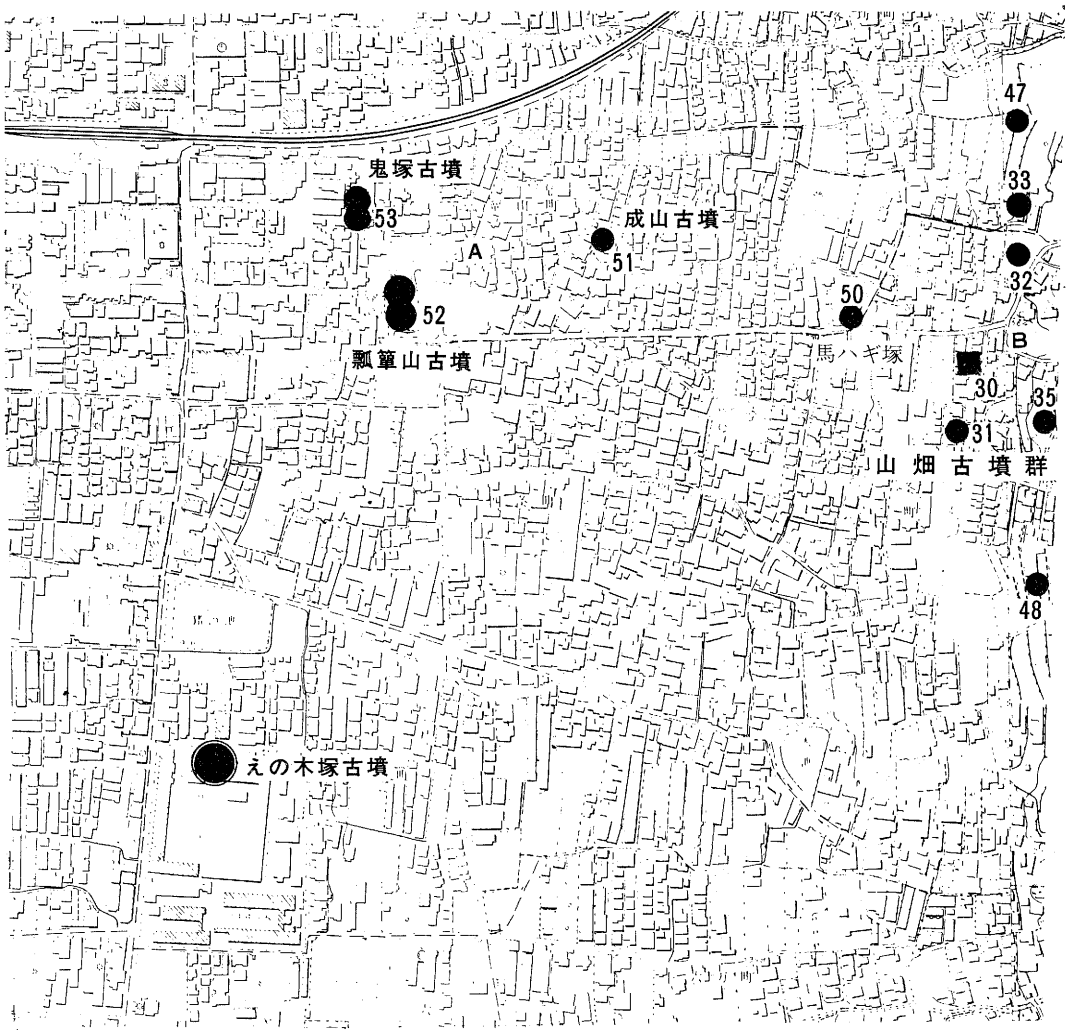


2．山畑古墳群の立地と構成

山畑古墳群は、周辺の群集墳と同様に生駒山地西ろくに発達した扇状地上に分布している。現在確認出来る古墳の総数は、地形・分布状況を考慮して他の古墳群と分離し、破壊を受けたものを合せて55基を数え、中型の後期群集墳である。河内地方では、もっとも一般的で、閃緑岩の自然石を使用した横穴式石室を内部主体としている。

古墳の分布は、標高15ｍを測る扇状地末端近くに双円墳で、南北両丘に比較的古式の横穴式石室（第３図）を持つ瓢箪山古墳があり、その西北80ｍには、江戸時代の文書に記録される鬼塚古墳（双円墳？）、東方200ｍには埴輪の存在が知られる成山古墳(円墳)等のＡ支群として包括出来る一群があり、

第２図　山畑古墳群分布図

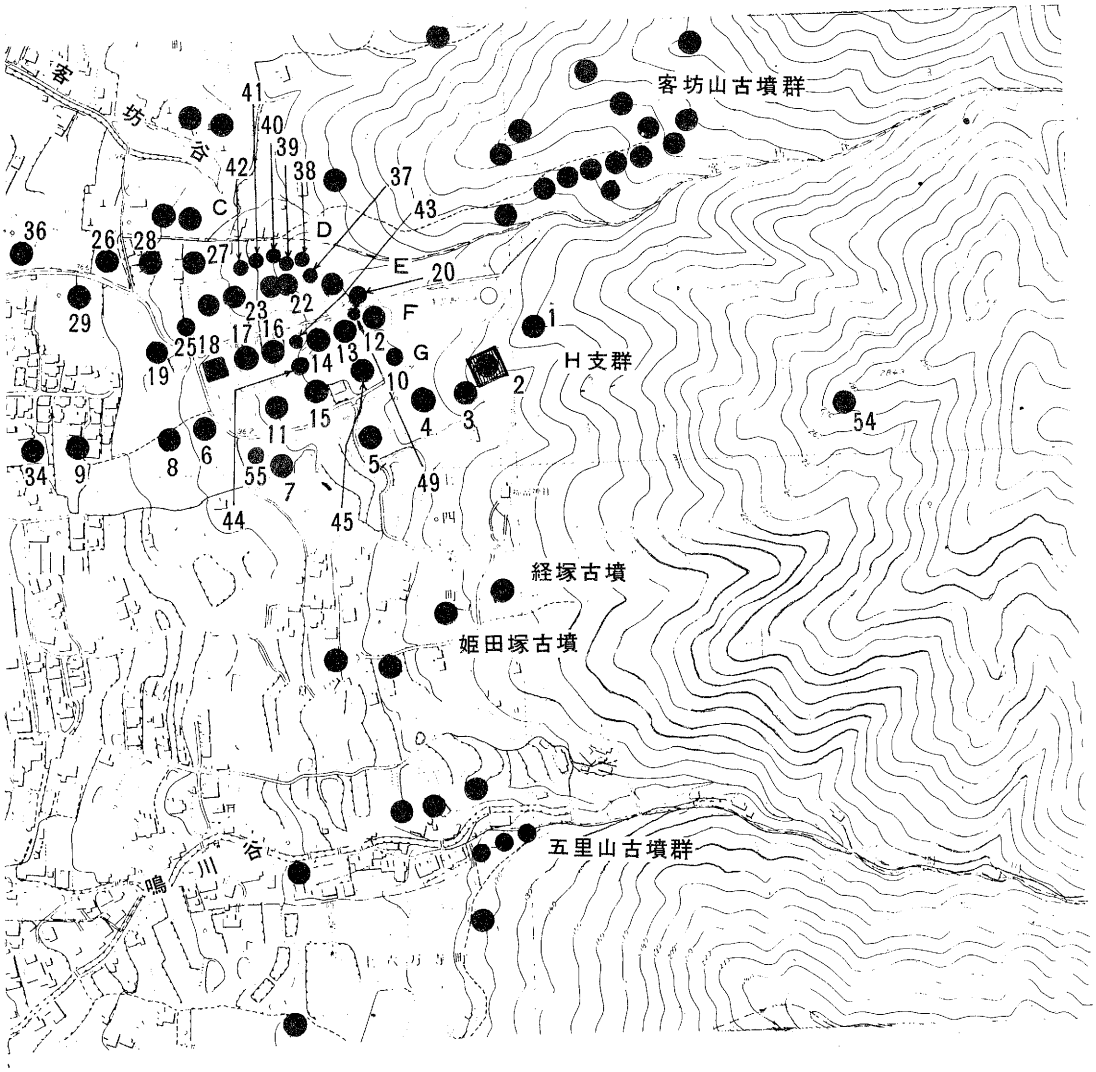


古墳群でも最も早い6世紀前半に形成され、当時の盟主的存在と見ることが出来る。

これらは、高安千塚の分布する地域でもっとも早く扇状地の末端に向きをたがえ、前方後円墳で古式の横穴式石室を持つ郡川西塚・東塚両古墳の形成と類似している。

瓢箪山古墳の南方200mには、昭和46年の縄文後期の遺跡で知られる縄手遺跡の調査で、ひれ付円筒埴輪・子持勾玉・祭祀遺構等の伴う中期の円墳、えの木塚古墳の発見があり、本古墳群形成に先立つ氏族の系譜を遡ることが出来た。

さて、A支群の形成に続いて、扇状地の下半部に、山畑33号墳をはじめ30 35・31・馬ハギ塚古墳等の造営が行なわれたものと考えられる。山畑30号墳は、方墳で内部に2つの横穴式石室を有していたことが知られ、6世紀の中葉前後の造営にかかるもので、B支群として包括出来る。



次期は、B支群の区域からやや急斜面をへだてやや斜面の一定した扇頭部～尾根上に東西に各支群を構成して形成されていったもので（標高60m～150m）、形成の終末は7世紀初頭を出ない。特に扇頭部は扇状地中央部・末端部とは異り、分布の広がりは地形に制約を受け極めて近接したものとなり、平面的には扇頭部頂点を中心に西へ末広がりに分布させることになったようである。

最も北に位置するC支群は、現在ほとんど墳丘の原形を残さないが多くの須恵器が開墾で出土し、少なくとも数基の古墳の残骸が埋没しているものと思われる。C支群の北側は、客坊谷の谷川筋となり、古墳群ないしは墓域を自然区画している。

南にならぶD支群は、本書にのせる山畑38・39・40号墳と続く支群で、墳丘・石室・副葬品の点で若干他の支群と性格は異るものと思われる。

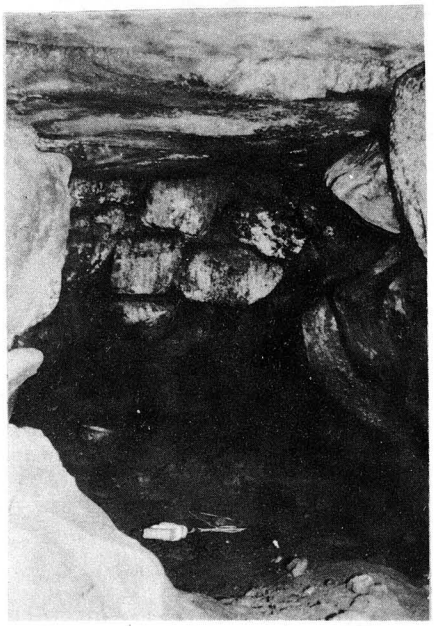
E支群は、C～H支群の分布区域の中で、北は客坊谷、南は扇状地内に東西に走る小谷状地形との間に挾まれる尾根状地形上の最高所に形成されている支群で、本書にのせる山畑22・25号墳を一連とする支群で、西端は尾根状地形の西端、19号墳で終っている。

F支群は、E支群の南に並ぶ一群で、古墳の分布している扇状地の上半部の中でも最も地形の高い好条件の筋で、構成される古墳には、大型の横穴式石室それも両袖式の石室がほとんどである。F支群はB支群に続くC～H支群の内、中心的支群といえる。

G支群は、F支群より南へゆるやかに傾斜する斜面にならぶ一群で、最も東端に位置する10号墳は、長さ6mと最も小型の石室内に3回に亘る埋葬が行なわれ、最後の埋葬が7世紀後半に下り、本古墳群での追葬の下限を知れる（中世などの石室再利用を除く）古墳でもある。

H支群は、最も南の尾根上に続く一群で、中には、本古墳群中唯一の上円下方墳（尾根整形加工）で、最大の石室規模を誇る2号墳（石室全長16.2m－第4図参照）が含まれている。

A・B両支群を除いて、C～H支群の形成は、石室・遺物の上から見て、比較的短期間の間に形成されたものと考えられ、6世紀後半も後半期の築造になるものと思われ、7世紀前半に入って新たな古墳の築造は行なわれなかった様である。



第3図　瓢箪山古墳北石室

●印－推定規模
＊印－現在測定出来る寸法

第1表　山畑古墳群一覧表

名称	墳丘			石室の形	石室の主軸	玄室				羨道				現状
	墳形	径	高さ			奥壁幅	羨門幅	長さ	高さ	入口幅	羨門幅	長さ	高さ	
山畑1号	円墳	12.0	2.5	左袖	S34°W	1.48	1.20	3.25	1.08	1.60	1.04	7.64	＊0.5	完存
2	上円下方墳	上円部14 下方部28	3.5 4.5	左袖	S15°W	2.05	2.60	6.44	3.30	1.80	1.90	10.24	2.00	〃
3	不明	—	—	左袖	—	—	—	—	—	—	—	—	—	半壊
4	円墳	10.0	2.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	完存
5	円墳	12.0	3.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
6	墳	10.0	2.5	無袖	S21°W	1.30	1.40	10.52	2.00	—	—	—	—	不明
7	円墳	10.0	1.7	左袖	—	1.40	—	4.60	2.20	—	—	—	—	半壊
8	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破壊
9	円墳	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
10	円墳	8.0	2.0	片袖	S25°W	1.30	1.50	3.40	2.20	—	1.00	2.60	—	半壊
11	円墳	12.0	3.0	両袖	S16°E	2.28	2.46	4.76	3.40	—	1.70	1.80	—	完存
12	円墳	15.0	3.5	両袖	S16°W	2.20	2.58	5.05	2.96	—	1.88	3.30	2.00	〃
13	円墳	14.0	3.0	左袖？	—	1.80	1.80	4.20	＊1.5	—	—	—	—	半壊
14	円墳	15.0	3.5	左袖	S13°E	2.38	2.88	5.16	2.24	—	1.78	3.64	1.9	完存
15	円墳	12.0	2.5	左袖	S17°E	1.72	2.02	4.50	2.64	1.73	1.75	4.42	1.8	〃
16	円墳	—	—	—	—	2.00	—	—	—	—	—	—	—	半壊
17	円墳	—	—	両袖	S33°W	2.60	2.62	5.06	2.90	1.6	1.61	3.90	1.61	破壊
18	方墳	10.4	—	左袖	S70°W	—	2	4	—	—	1.5	2.20	—	〃
19	円墳	11.0	4	左袖	S10°W	1.65	1.80	3.95	1.52	—	1.34	3.90	＊0.37	完存
20	円墳	9.0	2.0	右袖	S42°W	1.68	1.96	2.91	1.90	1.90	1.75	1.60	1.22	〃
21	円墳	15.0	3.0	左袖	S19°W	1.75	2.05	4.35	2.85	0.93	1.73	4.10	1.9	〃
22	双円墳	西丘15.0 (30.0)	4.5	左袖	S25°W	1.45	1.36	3.38	1.76	—	1.00	6.42	1.7	〃
23	円墳？	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破壊
24	円墳	12	4.5	左袖	S24°W	1.36	—	8.40	—	1.55	1.55	7.55	—	完存
25	円墳	—	—	左袖	S27°W	1.25	1.21	4.30	＊1.6	1.82	1.15	7.65	＊1.6	破壊
26	—	—	—	無袖	S4°W	1.70	1.62	9.14	—	—	—	—	—	〃
27	円？	—	—	右袖	W	1.58	1.62	3.70	2.30	1.36	1.42	—	—	〃
28	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
29	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.5	4	—	〃
30	方墳	10		西－左袖	—	2.00	—	5.40	—	—	1.3	3	—	〃
31	円墳	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
32	円墳	8.0	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
33	(円墳)	—	—	両袖	S24°E	2.00	2.20	4.88	—	1.42	1.52	5.75	—	〃
34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
35	—	—	—	左袖	S7°E	1.35	1.39	4.02	—	1.09	1.23	3.34	—	〃
36	円墳？	●10.0	2.0	右袖	S24°W	＊1.95	1.95	4.00	＊1.5	1.7	1.75	2.25	—	半壊
37	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
38	円墳	11.0	2.5	無袖	S23°W	1.50	1.25	5.25	＊1.7	—	—	—	—	〃
39	円墳	8.0	1.5	無袖	S30°W	1.20	1.05	4.65	＊1.3	—	—	—	—	〃
40	円墳	11.0	2.0	無袖	S43°W	1.15	1.33	4.20	＊1.20	—	—	—	—	〃
41	円墳	●10.0	1.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
42	円墳？	●10.0	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
43	円墳？	●10.0	＊1.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
44	円墳？	●10.0	＊1.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
45	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破壊
46	円墳？	●10.0	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	埋没
47	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破壊
48	—	—	—	左袖	S13°W	1.76	2.00	3.70	＊1.0	1.72	1.0	6.75	1.0	半壊
49	円墳？	●8.0	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
50	円墳？	●15.0	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
51	円墳	15.0	2.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	完存
52	双円墳？	50.	3.5	左袖	S48°W	1.99	2.00	2.43	＊1.1	—	0.8	4.95	1.1	〃
53	双円墳	●約40	5.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破壊
54	円墳	8.0	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	完存

3．古墳の形態と規模

山畑古墳群を構成する各古墳は、もっともポピュラーな円墳の他、方墳・双円墳を始め特異な上円下方墳が含まれ、群集墳を特色のあるものとしている。

もっとも時期の早いＡ支群の瓢簞山古墳は、後世の変形を受け、南北に主軸をおく全長50ｍ、高さ５ｍを測る双円墳（前方後円墳の可能性もある）で両丘に各々横穴式石室を有し、現在北石室のみ開口している。

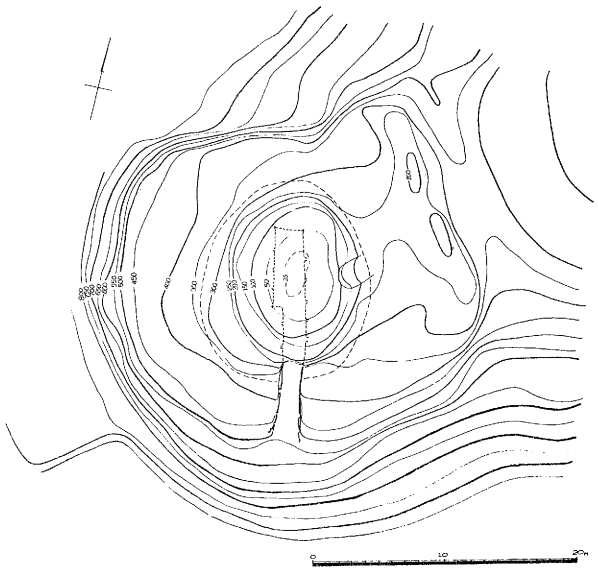
また、鬼塚古墳も江戸時代貞享年間の四条村絵図によると瓢簞形を書き印されており、瓢簞山古墳の規模より一まわり小型である。

Ｂ支群の内、現在見ることの出来る古墳は、馬ハギ塚のみであるが、30号墳は、１墳丘内に２つの横穴式石室を有する方形墳であることが報告されており（１辺10ｍ、石室平行）、高句麗・百済の古墳との関連に注目されている。

Ｅ支群では、本報告書中の22号墳が双円墳で、東西両丘に各々横穴式石室を有していたが、東丘のみ破壊を受け現存しない。現在、西丘のみ東大阪市立郷土博物館敷地内に保存している。

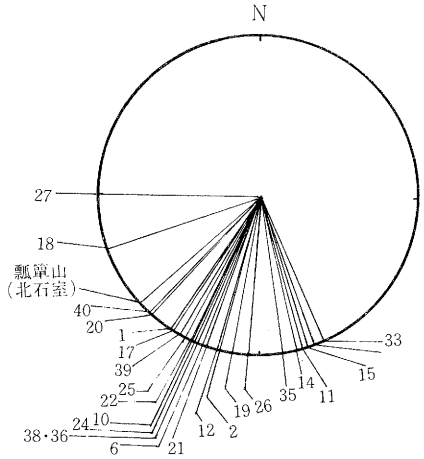
また、Ｆ支群では、昭和26年、大阪府による緊急調査が行われ、18号墳が西方に開口する石室を持つ方墳（一辺10.4ｍ）であったことが知られ、Ｇ支群をへだてた南端のＨ支群では狭い尾根上地形という悪条件を克服し、一辺28ｍの方形土壇上部に径14ｍの円墳をのせた上円下方墳の２号墳がある（第４図参照）

この様に古墳の外形上の分類では、Ｃ・Ｄ・Ｇ支群を除く各支群に円墳以外の特異な古墳が含まれることは注目する必要があろう。



第４図　山畑２号墳墳丘測量図

第５図　石室の開口方向



他の古墳は、約15～10ｍ前後の円墳と考えられるが、墳丘は変形を受け、旧状を残していないものや石室も基底部のみ残していたものが多く、古墳の規模の復原は、石室特に玄室の規模の比較にたよらざるを得ない。第６図は、実測可能の石室（玄室部）の比較表である。

各古墳の石室は、各支群によって、規模・形態・手法に若干の差が認められ、Ａ支群の瓢箪山古墳北石室は、玄室長2.43ｍ、巾1.99ｍ（石室下部埋没）を測る方形に近い平面プランを持つ左片袖式の古式石室である。

横穴式石室は、生駒山地西麓の古墳全般に亘り奥壁に向い、左に袖のある左片袖式が多く、本古墳群でも支配的であるが、他に両袖式がＦ支群（18号墳のみ除く）とＢ支群の33号墳、Ｇ支群の11号墳にも見られる。

右片袖式の石室は、Ｄ支群の27号墳、Ｅ支群の20号墳にわずかながら存在する。また、無袖式は、生駒山地西麓では非常に少いもので、平尾山千塚（柏原市）に多く見られる形式とは若干異り、入口部へ広がるものと、せばまるものとに分れる様であり、Ｄ支群の26・38・39・40号墳、Ｇ支群６号墳に見られる。なお、Ｅ支群の21号墳・24号墳等はほとんど袖のない左片袖式系のもので、袖の退化過程の石室であろう（第２表参照）。

各古墳の石室開口方向は第５図の通りで、Ｄ支群の27号墳、Ｆ支群の18号墳は共に西に開口している他、扇状地形の扇頭部に近い程、西への指向性が強く、

また北端の谷川筋（D支群等）に近い程西への指向性が強いようである。

このことは、八尾市郡川群集墳の分布調査でも指摘した通りで、石室の主軸が一概には等高線の方向に規制を受けているとも断言出来ず、むしろ各古墳への墓道との関連が重視される必要がある。

また石室の規模についてみると、第3表のように、E支群の20・22・27号墳及びG支群の10号墳、D支群の各古墳は最も規模の小さな石室を有している。このことはC～H支群の中でも北半部の支群に多くみられることと関連して被葬者の階層を考える上に興味深い。ただし、石室の規模は、10号墳での3回の埋葬例が示す通り、被葬者の人数には余り影響を与えていないことは確実であろう。

両袖式の各石室は、2号墳を除いて玄室の長さ・巾ともに約50cm前後の巾があるのみで、古墳群中大型の石室を構成し、各古墳の被葬者を考察する上に重要である。

さて、各石室の玄室平面の奥壁巾に対する長さの比は、各古墳とも約2.5を前

形式 / 支群	┘└	│└	┘│	││	不　明
A	—	1	—	—	2
B	1	2	—	—	6
C	—	—	—	—	2
D	—	1	1	5	2
E	—	5	1	—	2
F	4	1	—	—	4
G	1	2	—	—	2
H	—	4	—	—	3

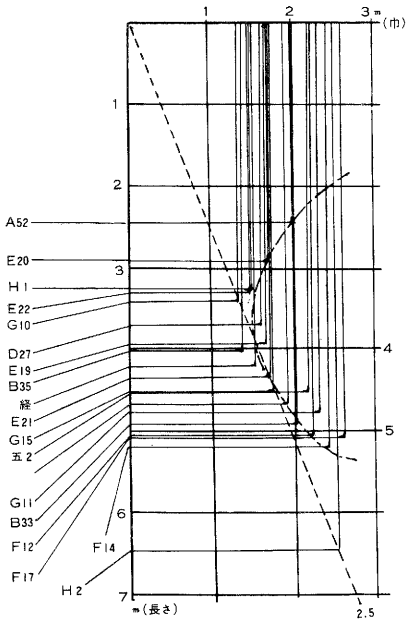
第2表　石室の形態別分類表

後して玄室の規模を決定している様である。

各石室は、扇状地の各所及び谷筋にある閃緑岩の自然石を運び石室を構築したものと考えられるが、D支群26号墳の石室の様に、一部に自然石を半裁して出来た平らな割面を石室内部に向けて積んだものが見られる他、切石等の技術は余く認められない。

さて、石室内部の設備としては、床面に敷石・棺台等を設けている石室が多く、玄室の奥半部のみ（25号墳等）や、玄室全面（33・21・22号墳）にわたって

第6図　玄室規模比較図



敷石をしたものがあり、棺台は、細長い石材を平行に2列並べて木棺を置くものが多い（35・40号墳）。また、石棺用のものとして26号墳のように20～30cm大の石を長方形に並べ内部に土を入れ上部を粘土でかためたものなど特異なものも見られる。

第3表　玄室の規模分類表　（　　）内は無袖式の石室

	4.0～7.0m²	7.0～10.0m²	10.0～13m²	13m²以上	不　明
A	1				2
B	1	1	1		6
C					2
D	1(3)	1		1	3
E	5	1			2
F		1	2	1	4
G	1	1	1	(1)	1
H	2			1	4

II　山畑古墳群の調査

1．調査の経過

山畑古墳群の調査は古く記録にのる所では、明治のはじめ、イギリス人ーウィリアム・ゴーランドが、高安古墳群や芝山古墳（石切町所在）の調査と前後して、本古墳群の調査を行なっている。彼の著書『The　dolmen and Burial mound in Japan 』の刊末古墳一覧表に「河内地方、四条村所在古墳」として計7基の古墳を計測しているのがそれで、本古墳群を含めた生駒山地西麓の横穴式石室及び横穴古墳群等について、はじめて学問的な目で調査の手を加えた。

これ以降、長い間これといった調査はないが、戦後の昭和23年、古墳群周辺の山林が大阪府により開墾の指定を受け、一応各古墳がその対象から除外されたが、一部の所有者によっては、古墳を無造作に破壊するものがあった。このため、大阪府教育委員会は、昭和26年から27年にかけて記録保存のために、山畑7号墳・18号墳・30号墳の3基の古墳の調査を実施した。調査は、堅田　直氏を中心として行なわれ、30号墳の調査では、1墳丘の中に2つの石室が平行して有していることが判明するなどの成果があった。(『大阪府の文化財』昭和37年3月)

昭和33年、旧枚岡市に「枚岡市文化財保護規則」が公布施行され、山畑古墳群が市の史跡として指定されたが、古墳群の分布する扇状地末端部からの宅地造成の急激な増加によって、緊急の調査・破壊が続いた。当時の調査は、枚岡市史編纂に当たっていた藤井直正を中心に水野正好・西谷　正・町田　章・伊藤久嗣諸氏の協力によって、かろうじて記録が残され山畑33号墳・35号墳・10号墳・16号墳等の調査が行なわれた。

これと平行して、古墳の分布調査や実測図の作成が、同市史編さん資料の作成と合せて行なわれた。（2・11・14・15号墳－昭和38年～39年）

昭和42年、枚岡・河内・布施三市の合併により東大阪市が誕生し、山畑古墳群の調査・保存等の事業も引き継ぎ、今日に及んだが、これまでに調査した古墳は、第4表に示す通りで、昭和42年12月、採石工事に伴う発見で、36号墳の緊急調査を荻田昭次氏らに委嘱し実施した。同古墳は、6世紀末葉の横穴式石室を持つ小古墳であるが、墳丘に埴輪を伴っている点注目された。（北野　保『横穴式石室に伴う埴輪の一資料』「河内考古学」2）

昭和44年、山畑古墳群の保存活用と博物館建設の計画化が進み、古墳群の総合調査の一環として国庫及び府費の補助を受け26号墳の他二古墳を対象とし、調査を実施した。

調査は、原田　修・久貝健・北野　保・本城節子・奥井哲秀らの協力のもとに行なった。この調査では、本書に報告する通り、石室内での埋葬のあり方を示す好資料を得た。

昭和46年、市立郷土博物館の建設が決定し、その敷地を山畑22号墳の北側に求めたが、分布調査の結果、4基の小古墳がかろうじて現存することが判明し、建物の位置を変更し敷地内に保存活用するため、同年3月、38・39・40・41号墳及び22号墳西丘の調査を合せて実施した。

また47年、古墳群の南端に市立縄手小学校分校（仮称、上四条小学校）の建設が予定され、敷地内の遺跡確認調査を、東大阪市遺跡保護調査会に委託して実施した。この結果、敷地の一画に石室の基底部が残っていることを確認し、現在、古墳の活用を前提として建設中である。

第4表　調査古墳一覧表

年　度	調査古墳名	調査内容	調査主体(者)	備　考
明治初年	山畑古墳群中の数基	石室計測	ウイリアム・ゴーランド	
昭和26年	山畑18・30・55号墳	発堀調査	大阪府教育委員会	開墾・破壊
昭和30年	山畑8号墳	石棺の実測	藤　井　直　正	
〃	山畑23号墳	遺物採集	〃	開墾・破壊
昭和34年	山畑27号墳	石室実測・遺物採集	枚岡市教育委員会	開墾・半壊
昭和35年	山畑10・16号墳	発掘調査	〃	半壊
〃	山畑33号墳	〃	〃	破壊
昭和36年	山畑35号墳	〃	〃	宅地造成・破壊
昭和38年	山畑2・14号墳	石室実測	〃	
昭和40年	山畑17号墳	発掘調査(一部)・石室実測	〃	宅地造成・破壊
昭和41年	山畑21号墳	発掘調査	〃	完存
〃	山畑24号墳	石室実測	〃	〃
昭和42年	山畑20号墳	羨道部発掘調査	東大阪市教育委員会	水道管敷設
〃	山畑36号墳	発掘調査	〃	採石・破壊
昭和44年	山畑6・25・26号墳	発掘調査	〃	26号のみ破壊
昭和46年	山畑22・38・39・40・41号墳	分布・発掘調査	〃	博物館敷地内整備
昭和47年	山畑48号墳	試掘調査(存在確認)	〃	校庭内に保存

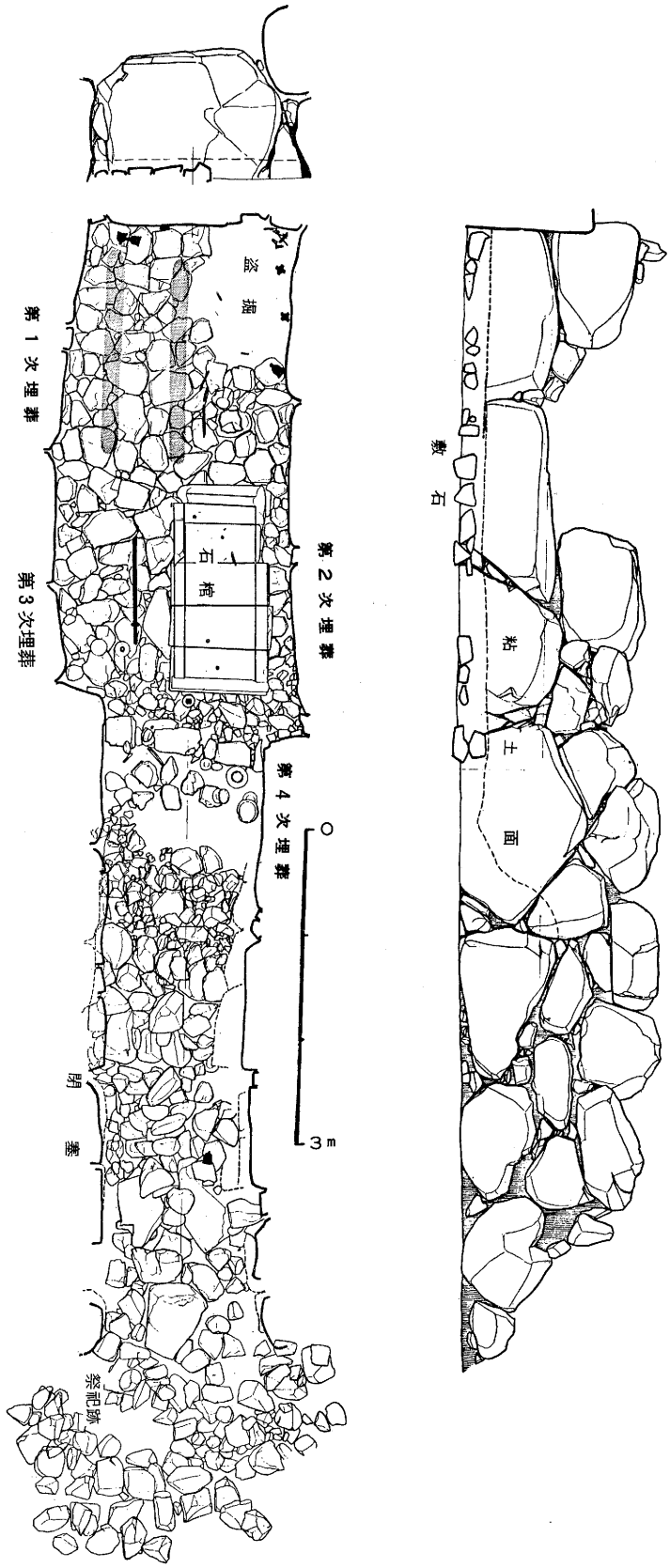
2．各古墳の調査

A．山畑33号墳の調査

客坊町1772番地、古墳群の中では比較的下の位置、標高70mの地点にあった古墳である。(B支群)付近は過去に開墾され、畑地として利用されていたが、昭和34年の末から宅地造成のための整地作業が行なわれたところ石組が発見され、古墳であることを確認した。すでに封土と石室の上部は失われていたが、石室の下部は地面の下に埋もれたままであり、石室内の埋葬状態や遺物ののこっている可能性があり、土地所有者横内六郎右衛門氏の諒承を得、昭和35年1月から4月にかけて、旧枚岡市教育委員会によって発掘調査を行なった。その結果、予想の通り埋葬状態について数かずの知見を得、出土遺物にも注目すべきものがあり、この古墳群の性格や、この地域の古代史を考える上に重要な資料を提供した。

石室は、その中心線がS24°Eを示し、玄室は奥壁での幅2.0m、長さ4.88m、羨門での幅2.20mの両袖式で、羨道の幅は羨門で1.52m、前方の部分で1.42m、長さ5.75m、石室の全長10.63mをはかる規模である。石室を構成している石材はかなり大きい閃緑岩の自然石が用いられていた。玄室内には地表面まで土砂が充満していたがそれを除去すると、玄室内には一面に粘土が敷かれていることがわかった。この粘土面には玄室の北西寄りに二本の溝が石室の中心軸と平行に検出され、塡土中に凝灰岩の石材が破片となって出土したため、この位置に組合式石棺（第1号石棺）を埋置したことが推察される。玄室の東北隅には、径30cmの石の上に1枚、粘土面に2枚の杏葉、西北隅に鉄鏃群、東壁との間には鉄刀1、鞍磯金具1、金環1、杏葉1、その他馬具破片・須恵器の長くび壺1、土師器の鉢などが出土した。
また、玄室の東南部には、凝灰岩製の組合式石棺（第2号石棺）のうち、底部5枚、側石3枚、さらに蓋石1枚が側石にもたれかかった状態で遺存していた。この石棺内には計4個、2セットの銅環と鉄製刀子、石棺の西側には、石棺より30cmのところに長さ1.06mの直刀が刃先を北に向けておかれ、須恵器の大型高坏の蓋2枚、石棺の南側に須恵器の坩1個がおかれていた。従って、玄室内には2つの石棺と1つの木棺がおかれていたことがわかり、第2号石棺の北端と西壁との間には東西に3個の平たい石が並べられ石室を二分していること、さらに石室の床面に敷かれた粘土の色が異なり、石棺の埋置された時期に差のあることを示している。なおこの粘土を除去すると玄室内には一面に敷石の並べられていることがわかった。

羨道の大部分は大小の石を積み上げた閉塞設備があり、その高さは最高1.2mをはかった。羨道の北端部、閉塞の直下には一区画があり、ここから人骨片・土師器の鉢1・坩1・平鉢1・盌5・須恵器の高坏1・金環2が出土し、ここにも一体の埋葬の行なわれたことが考えられる。これらの事実を整理すると第5表の通りになるが、玄室は3分して三回の埋葬、羨道の奥に一回の埋葬が想定される。



第7図　山畑33号墳石室実測図

第8図　第2次埋葬の石棺

第1次埋葬とその遺物

玄室を二分した奥半分、西壁寄りに凝炭岩製の組合式石棺に遺骸を入れて埋葬された。副葬品のうち注目されるものは5枚の杏葉で、大きさ・製作手法が同じでありセットであったと考えられる。いずれも鉄地金銅張で鐘形をなし、下縁5ヵ所をとがらせ、鉄板の上に斜格子の鉄線を張り、その支点に忍冬文をつけている。全長19.5㎝、下辺の幅12㎝をはかる。茨木市宿久庄に所在した南塚古墳から出土している杏葉をまねて製作されたと考えられる。(表紙カット)

第2次埋葬とその遺物

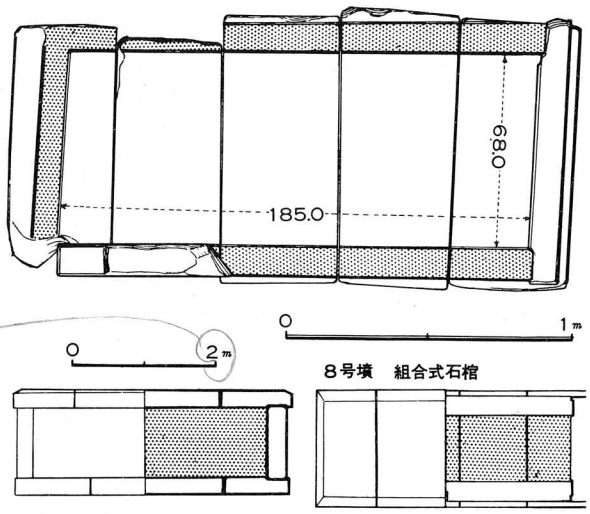
玄室の前半、東壁寄りにおかれた凝灰岩製組合式石棺に埋葬され、石棺内に4個の銅環が出土していることから、2体の埋葬が推定できる。銅環は棺内の前よりに2個、後方に2個が存在したから、頭部を交互にして遺骸をおさめたものと考えられる。

第3次埋葬とその遺物

第2次埋葬の石棺と西壁の間に木棺による1体の埋葬が考えられ、大刀1・須恵器坏蓋2を副葬している。他に副葬品はないが、大刀は長さ106㎝を測る大型のものである。

第4次埋葬とその遺物

羨道のもっとも奥、閉塞までの間隔約1.5mに副葬品と考えられる土器と2個の金環が出土し、また人骨が検出され、この部分で一体の埋葬が行なわれたことがわかる。



第9図　石棺実測図

閉塞・羨道とその遺物

閉塞は羨道の大部分にわたって大小の石をつみ上げていたが、閉塞の上面には須恵器の子持台付壺、土師器の皿・坩などが出土した。また羨道の南端、すなわち入口の部分には、羨道の端より南へ２ｍ、幅３ｍにわたって大小の石を円形に積み、中央の凹みに須恵器の大甕の破片が多量に出土した。故意に破砕された状態であり、まわりから出土した多数の須恵器と共に閉塞後に儀礼の行なわれたことを物語っている。

第５表　山畑33号墳の出土遺物

埋葬の区分	場　所	埋葬の主体	副葬品				
			装身具	馬　具	武　器	土　器	
						須恵器	土師器
第１次埋葬	玄　室 奥半部	凝灰岩製 組合式石棺	金環(1) 金環(2)	杏葉　(5) 雲　珠 兵　庫　鎖 く　つ　わ 鞍磯金具	鉄　刀 鉄　鏃	脚付長頸壺 (1)	鉢　(1)
第２次埋葬	玄　室 前半部	凝灰岩製 組合式石棺	銅環(4) (石棺内)		鉄　鏃 刀　子		
第３次埋葬	玄　室 前半部	木棺？			鉄　刀	蓋　(2) 坩　(1)	
第４次埋葬	羨門部	木　棺　？	金環(2)			高坏(1)	鉢　(1) 坩　(1) 平鉢(1) 盌　(5)
	閉塞部					子持台付壺 (1)	皿　(1) 坩　(1)
	羨道部					台付長頸壺 (1) その他破片 多数が出土	

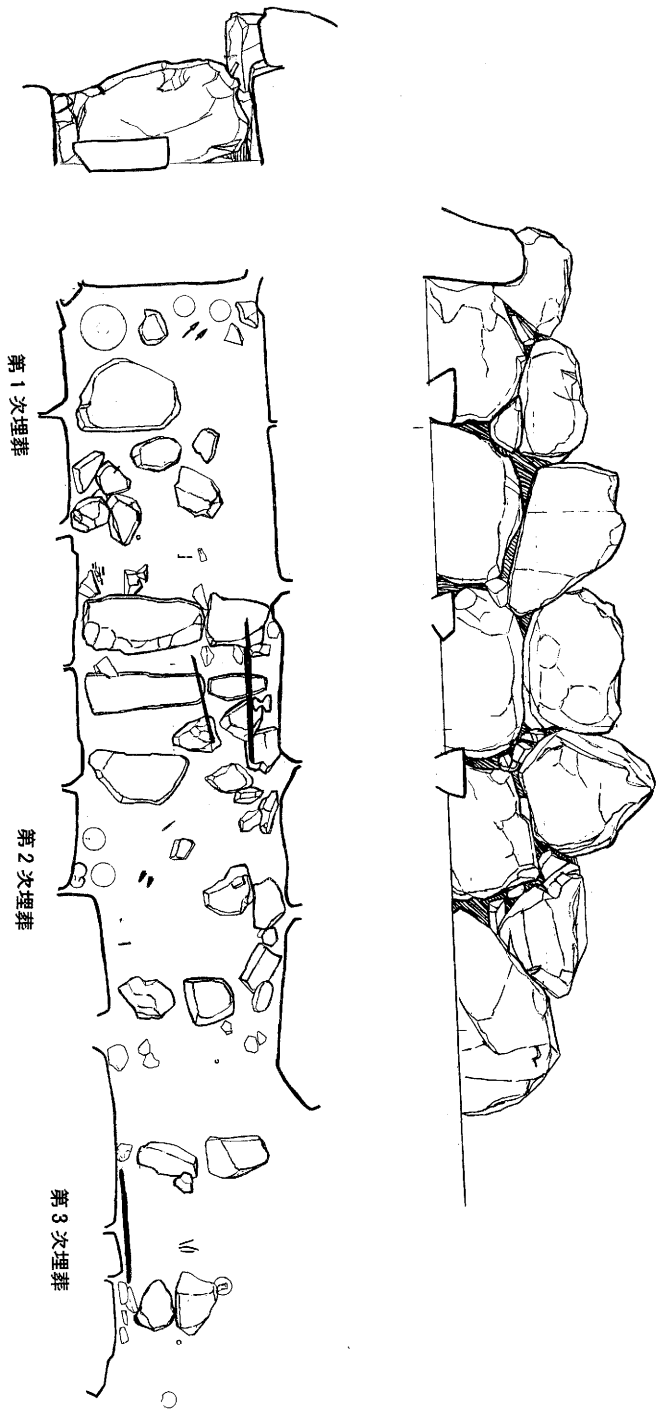
B．山畑35号墳の調査

四条墓地の付近は現在すっかり宅地化しているが、何基かの古墳が分布していた。昭和37年２月、宅地造成のための作業中１基の古墳が発見され、２～４月にかけて旧枚岡市教育委員会で調査を実施した。

その結果、石室の基底部が残存していることを確認することができ、埋葬状態についていくつかの知見を得ることができた。中心線がＳ７°Ｅを示す横穴式石室で、西壁は最下段、東壁は２段目までをのこしているに過ぎなかったが、玄室は奥壁での幅1.35ｍ、長さ4.20ｍ、羨道の幅1.23ｍ、左側にわずかな袖をもった比較的小規模な石室であることがわかった（第11図）。床面には敷石の設備は見られなかったが、表面の平たい石が規則的におかれていて、これが棺をおくための台であったと考えられる。この古墳からは凝灰岩製の石棺材が発見されず、それに対して鉄釘や鎹（かすがい）が検出されたことから、木棺による埋葬であったと考えられる。上記の棺台と見られる石の配列と遺物の配置状態から、この古墳の石室内に埋置された木棺が３基、従って少なくとも３体の埋葬が考えられる。

石室の上部が破壊されていたにもかかわらず、遺物はそれぞれ原位置を保ったまま遺存していた。遺物としては、先ず、奥壁の西南隅に須恵器の広口坩をのせた大

第10図　山畑35号墳全景

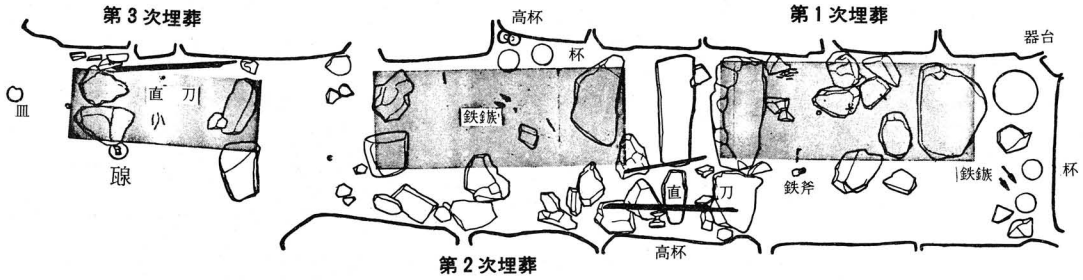


第11図　山畑35号墳石室実測図($\frac{1}{50}$)

型の器台がおかれており、奥壁の中央に蓋坏のセットが２組、鉄鏃などが出土し、東壁寄りには直刀２振と鉄鏃、須恵器の高坏１、袖の部分に須恵器の蓋坏のセット２組と土師器の皿、羨道部の西壁に接して直刀１振がそれぞれ出土した。これらの遺物を出土個所によって整理し、棺台の配置とを考え合わせると次のような結果が得られる。

棺台と考えられる石は、閃緑岩の平たい自然石を用い、玄室北半の西壁寄りに1.95ｍの間隔をおいて２個（第１次埋葬）、次に玄室南半と羨道部にまたがって石室の中心に1.85ｍの間隔をおいて２個（第２次埋葬）、さらに羨道部には、東西に２個ずつ比較的小さい石を並べ1.30ｍの間隔をおいて４個（第３次埋葬）の石がそれぞれおかれていた。なお、奥壁より2.7ｍのところには、27cm×80cm、17cm×40cmの石を二つ並べてあったが、これは玄室を二分して第１次埋葬と第２次埋葬とを区画した仕切りであったと考えられる。

第12図　埋葬復原図



第１次埋葬とその遺物

玄室北半の西壁寄りに、おそらく木棺におさめた遺骸を埋葬したと考えられる。棺台の中間に鉄 鏃と銀環が出土したが、これは棺内におさめられていた副葬品であろう。奥壁の西北隅には、先に記した通り、広口坩をのせた高さ64cmの大型の器台がおかれていた。器台に対して、上にのせられていた坩が小さいのは不均衡であるが、有り合わせのものを利用したのかも知れない。器台の右がわには、須恵器の蓋坏（蓋と身を重ね合わせた状態）２セット、鉄鏃２本がおかれていた。また玄室の中央から出土した鉄斧もこの第１次埋葬に伴う副葬品と考えられる。

埋葬の区分	場　所	埋葬の主体	副葬品				
			装身具	武　器	農工具	土器	
						須恵器	土師器
第1次埋葬	玄　室 奥半部	木　棺　？	銀　環 (1)		鉄斧(1) 鉇　(1)	大型器台(1) 坩　(1) 蓋坏(2)	
第2次埋葬	玄室前半 ～羨道部	木　棺　？	銀　環 (1)	鉄鏃(2) 刀子(2) 直刀(1) 短刀(1)		蓋坏(2) 高坏(2)	
第3次埋葬	羨道部	木　棺　？		銀　環 (1)		瑞　(1)	

第6表　山畑35号墳の出土遺物

第2次埋葬とその遺物

第1次埋葬を行なったあと、またはこの第2次埋葬の際に、東西に二つの石をおいて区画を設け、その南がわに埋葬を行なったと考えられる。棺内には2本の鉄鏃と2本の刀子を入れ、袖の部分から出土した須恵器の蓋坏2セットと高坏がこの第2次埋葬に伴う副葬品であったと想定される。

この二次の埋葬の中間に、東壁に接して直刀1振と短刀1振が石の上におかれ、さらに須恵器の高坏1個が出土しているが、1次・2次どちらに伴うものか不明である。

第3次埋葬とその遺物

羨道部におかれていた4個の石を棺台として木棺をおいたと考えられるが、間隔が1.3m前後しかなく、棺としては小型である。棺内に数本の鉄鏃を入れ、西壁に接しておかれていた直刀1振、羨道の中央部で出土した須恵器の瑞と銀環がこの第3次埋葬に伴う副葬品と考えられる。

この1～2次の埋葬は、土器の形式から見ると年代の距りが少なく、同一時期に相接して埋葬が行なわれたものと推察することができ、ひいてはこの古墳の築造年代が6世紀後半の初頭にあったことが想定できる。第3次埋葬は若干時期が下るものと思われる。

C．山畑25号墳の調査

山畑25号墳は、E支群の西端近くに位置し、標高約92mを計る。調査は、昭和44年3月～4月にわたり実施した。古墳の墳丘は全く削平され、その規模、旧状は知り難い。

調査はトレンチ掘りによって石室位置確認からはじまったが、比較的良好に石室の下半部及び埋葬時の状態をよく残していた。

横穴式石室は、S－27°－Wに開口する左片袖式の石室である。玄室に対し羨道が比較的長く、その主軸は玄室主軸に対して約6°西へ偏じて付けられている。

玄室は、奥壁で巾1.25m、袖部1.21m、長さ4.3mを測り、奥半部には20～30cm大の自然石を雑然とならべ敷石床としている。羨道は、玄門部巾1.15m、入口巾1.82m、長さ7.65mを測り、石室入口はラッパ状に開口していたものと考えられる。また玄室の東西両壁とも西へ傾斜しており、特異な石積法を行っている。

石室の上半部は欠いており、巾が狭く全体として細長い石室空間を構成していたと考えられるにもかかわらず、調査の結果、玄室に2回、羨道に2回、計4回に亘る埋葬が行なわれたことが判明した。

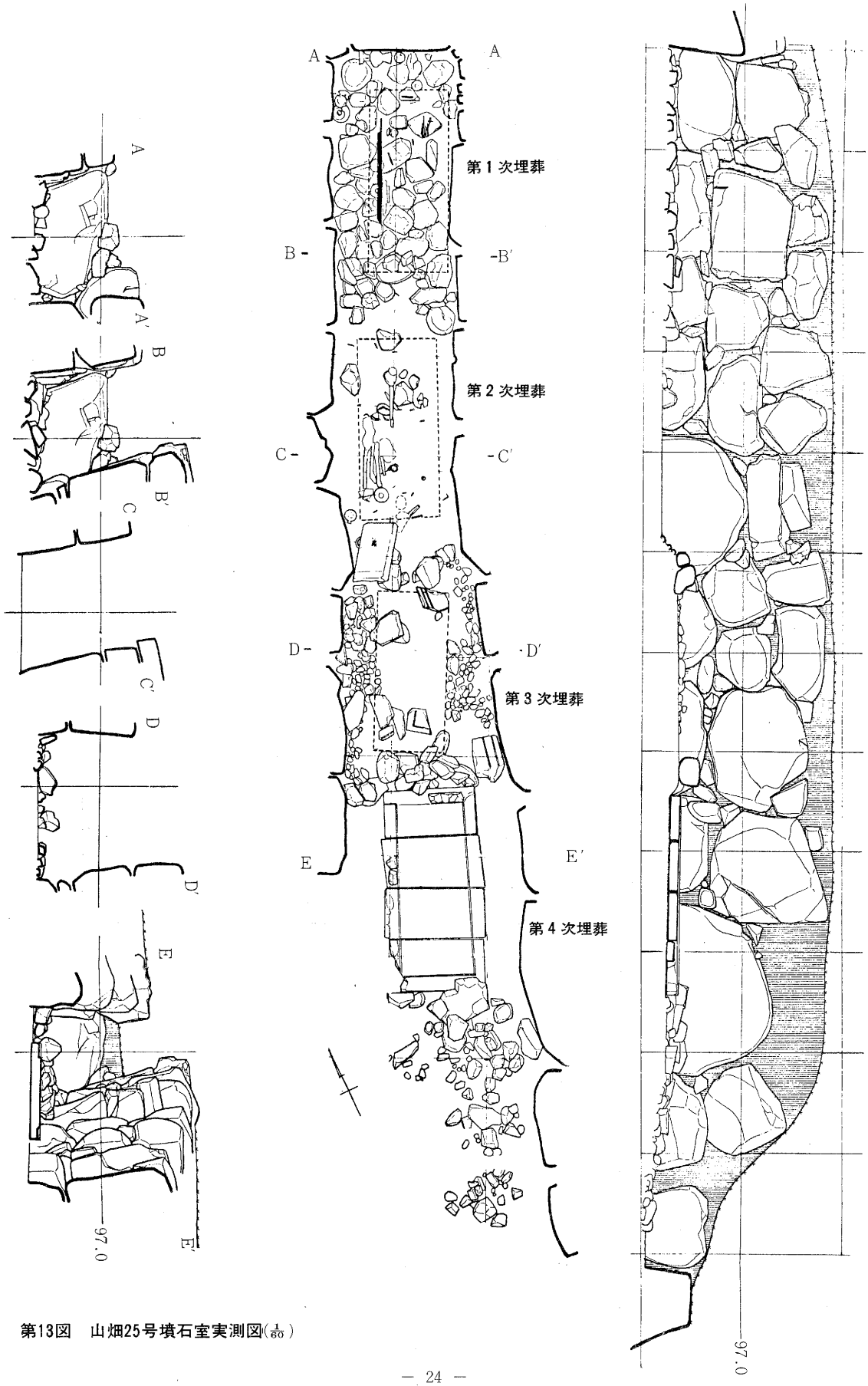
玄室奥半部の敷石上には、石室主軸にそって、直刀(1)と大腿骨片が遺存し、その下部には、須恵器坏蓋身(1)、坩(1)を検出した。これらの周辺には若干の鉄鏃・刀子(2)・小型壺を置いている。

また、奥壁・西壁に沿って、子持高坏の蓋(3)・長頸壺(1)・高坏(1)・壺(1)が副葬されていた。

周辺には鉄釘等の検出はなく、金具を使用しない木棺か他の材質棺であったことが考えられる。(第1次埋葬)

これに続く第2次埋葬も木棺によるものと考えられ、敷石の切れる部分より袖部の間に多くの鉄釘・鏃を検出している。木棺は第1次埋葬部の敷石の内、3石を配置利用して棺台としている。　埋葬部分中央には、大腿骨片が遺存し、須恵器坏(2)・坩(1)・高坏(1)・提瓶(1)・土師器小型鉢形土器(1)・皿(1)・馬具として轡の副葬があった。

第3次埋葬は、羨道部の奥半部つまり袖部からやや広がった部分に行なわれていた。埋葬面は、第1・2次面より約15cm程、土砂堆積によって高くなった面を利用し、両壁にそって5～10cm大の小石を巾30cm程敷き、その間に凝炭岩製組合家型石棺を置いていたものと考えられるがその石材はほとんど失れていた。副葬品としては、耳環(1)・須恵器長頸壺(1)・棗玉(1)のみが遺存した。



第13図　山畑25号墳石室実測図(1/60)

最も入口に近い所に行なわれていた第4次埋葬は、第3次埋葬との間に20～30cm大の石を高さ20cmに並べて区画し、やや厚手の石材を使った組合式家形石棺を置いており、底板(4枚)のみが完存した。副葬品は皆無である。

石室の天井石がないので不確実であるが、第4次埋葬の行なわれていた羨道入口部まで天井石があったか問題であり、あったとしても通路である羨道部入口にまで埋葬せざるを得なかった必要性がここには認められる。

埋葬の区分	場所	埋葬の主体	副葬品				
			装身具	馬具	武器(工具)	土器	
						須恵器	土師器
第1次埋葬	玄室前半部	木棺			直刀(1) 鉄鏃(10) 刀子(2)	長頸壺(1) 高坏(1) 壺(1) 坩(1) 坏身(2) 小型壺(1) 坏蓋(1) 蓋(3) コップ型土器(1)	
第2次埋葬	玄室奥半部	木棺 (鉄釘、鎹)		轡(1)		坏身(1) 提瓶(1) 坩(1) 高坏(1)	皿(1) 小型鉢(1)
第3次埋葬	羨道奥半部	凝灰岩製組合式石棺	嚢玉(1) 金環(1)			長頸壺(1)	
第4次埋葬	羨道入口部	凝灰岩製組合式石棺					

第7表　山畑25号墳の出土遺物

D．山畑26号墳の調査

山畑26号墳は、25号墳の北西約50ｍの地点に位置し、標高約90ｍを測る。昭和44年３月、古墳を含む敷地に建物の話が持ち上がり、協議の結果保存不可能という結論のもとに記録保存を目的として十分な調査を実施した。

古墳は、25号墳同様、墳丘が全く削平され、北側は客坊墓地に切断され、西側も石垣で旧状を全くとどめていなかった。このため、石室基底部が埋没しているというわずかの望みを手がかりに敷地の南北にトレンチを設定した結果、石室の基底部が良好に遺存していることを確認した。

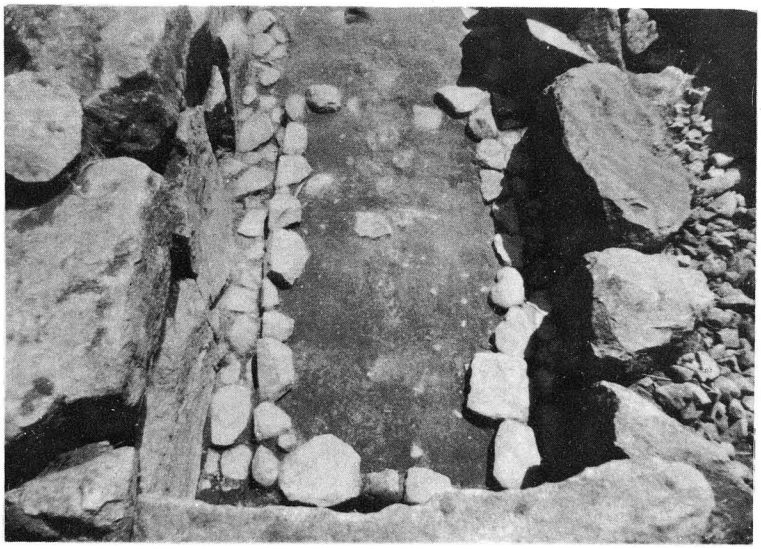
石室は無袖式の横穴式石室で、西壁は１段、東壁は２段に亘って残っていた。

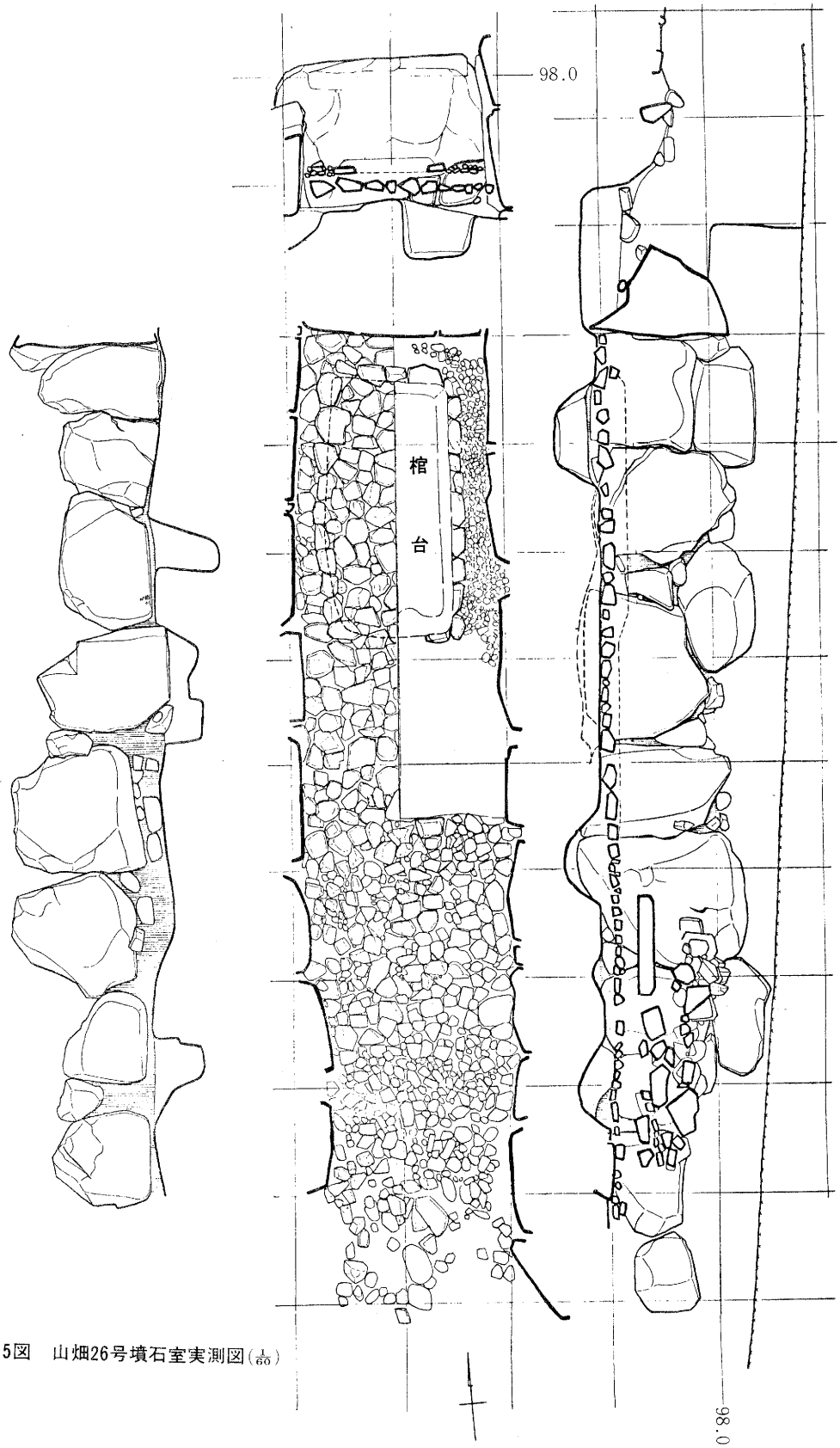
石室は奥壁部での巾1.7ｍ、入口部巾1.62ｍ、全長9.14ｍを測る中型の石室である。石材は、奥壁・西壁奥壁部に自然石を半截した割面をそろえて据えており、一部に割石積を加えるなど石室の整備化の一端を知ることが出来た。この様な手法は、他の石室では見られない。

石材の据え方も、奥壁部では1.7ｍ×1.5ｍの割石を用いて鋭い方を下部にして据え、その断面形は逆三角形となっている。石材の裏は、わずかな石と土でかためているのみである。他の壁の最下段の石材もこれに近い方法で行っており、２段目には比較的平らな石材をのせ、石組の安定を図っている。

石室入口部は、50～10cm大の自然石を積んだ閉塞が高さ1.5ｍ、長さ3.5ｍにわたって残っていたが、石材間には須恵器甕片や凝灰岩製組合家形

第14図　山畑26号墳の石室





第15図　山畑26号墳石室実測図（$\frac{1}{60}$）

石棺の蓋板（90×51cm）がはさまれている状態がみられ、幾度かの埋葬と石材の移動により、閉塞間にこれらの遺物が混入する結果になったものと思われる。

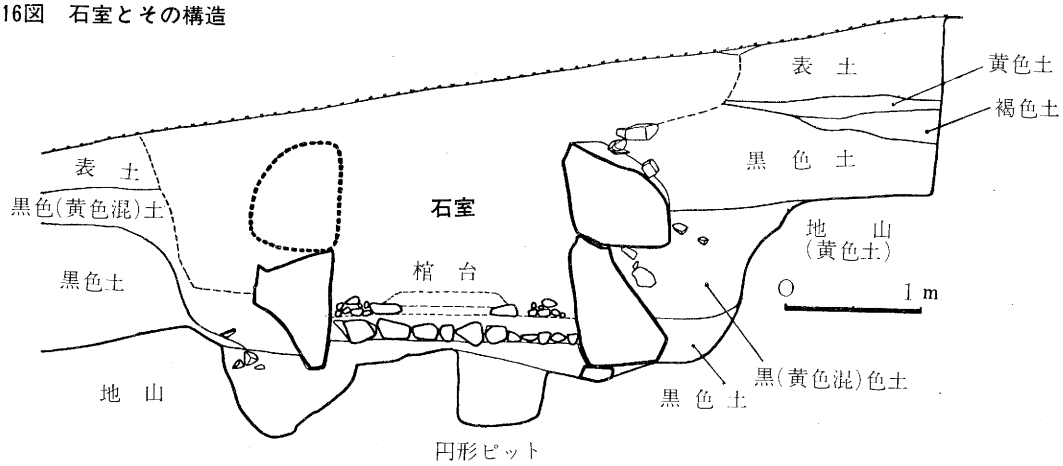
蛇足であるが本市上石切町所在の陶棺墳－幕尾古墳の閉塞間下部にも陶棺片や耳環等が混入していたことも同例である。

さて、本古墳では、埋葬当時の副葬品はほとんど皆無で、奥壁に接して須恵器瑞の他土師器皿片を若干検出したのみであるが、埋葬施設として、石室奥半部に当古墳群では珍しい石棺用の棺台が付設されていた。

棺台は、20～30cm大の比較的平らな自然石を使用し、石室主軸に長く長方形の区画を作り、内部に当地で弥生時代中期の包含層である黒色土を石と同高に入れ、黄色土をはさんで上部を粘土でかためている。

棺台は、南側石組の中央がなくなっているが、巾2.62m、長さ1.4mを測る。三壁との間は5cm～10cm前後の小石をつめ、排水溝的な設備としている。棺台の下部構造は、黄色土を約5cmの厚さに敷き、玄室部に相当する奥壁より4.5m所で切れ、さらに下部は石室全面にわたり30～10cm大の敷石をていねいに敷きつめている。

第16図　石室とその構造



敷石の下部は地山面となるが、石室の主軸と若干ずれるが東西2列の円形ピット（50×60cm）がならび、これらは吸水用のピットであるのか石室構築用のものであるのか不明である。

E．山畑36号墳の調査

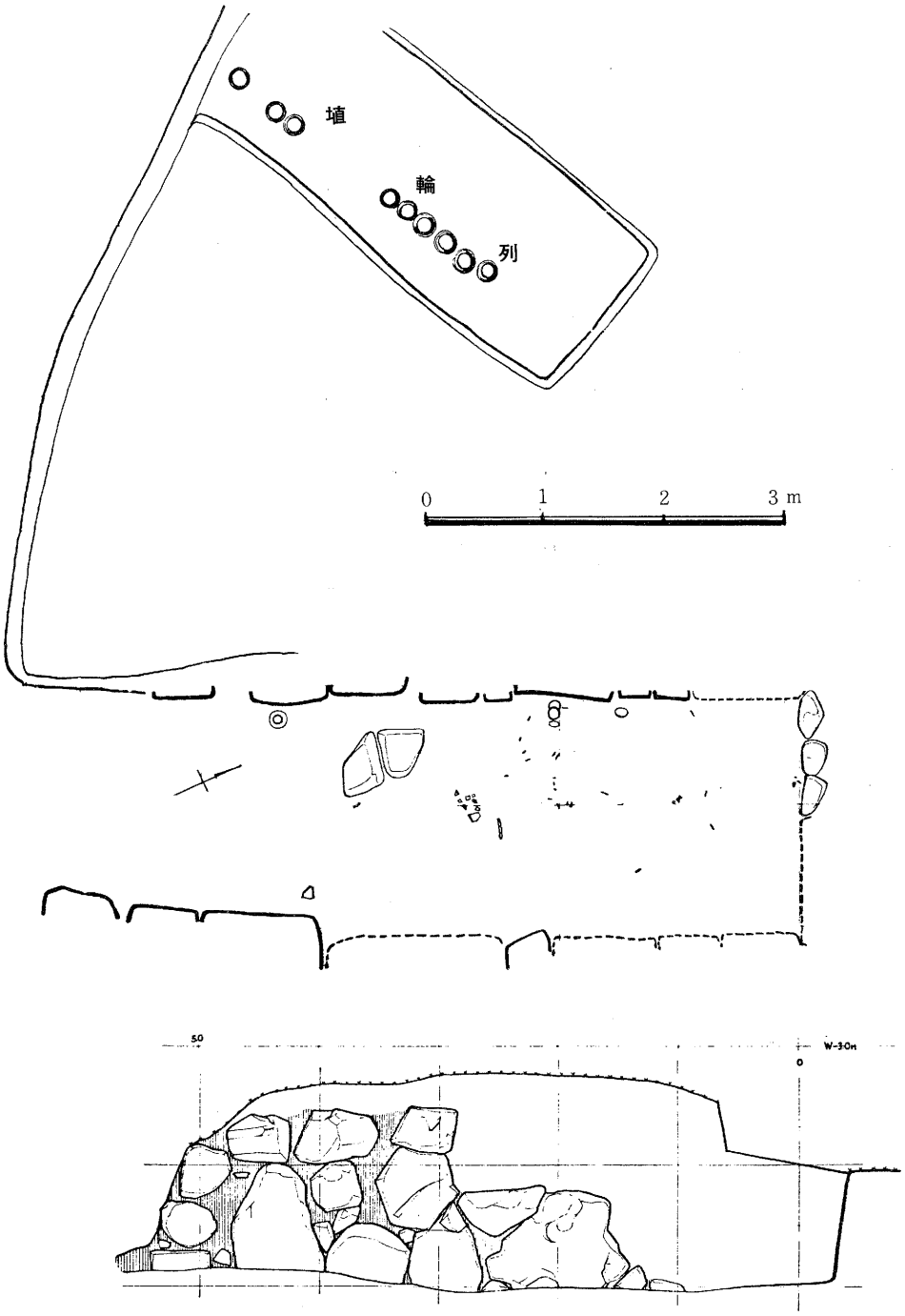
山畑36号墳は、D支群西端に位置し、標高約65mを測る。墳丘の周辺及び上部は、ほとんど削り取られてしまっており、全く墳丘の規模と形状をつかむことは出来なかったが、石室の残存部より推定して、少くとも径10mの円墳であったと考えられる。内部主体は横穴式石室であるが採石のため天井石と奥壁の全部が取り除かれ、両側壁も一部を残しているにすぎない。従って、奥壁下部に置かれていたと思われる3個の根石と東壁残存部の平面形からして S－20°－Eを指す右片袖式の石室と考えられる。石材は閃緑岩を用い、石室現存部の全長は、6.2m、玄室長3.9m、巾約2.0m、羨

第17図　埴輪出土状態

道部長さ2.2m、巾1.6mを測る。

玄室内は、かなりの攪乱を受けており、埋葬当時の状態はほとんどわからなかったが、玄室中央西壁に接して、須恵器壺・長頸壺・土師器椀等が出土した。また床面を清掃することによって玄室の前半部において、凝灰岩のばい乱土を検出し、凝灰岩製石棺を安置していたことが判明した。

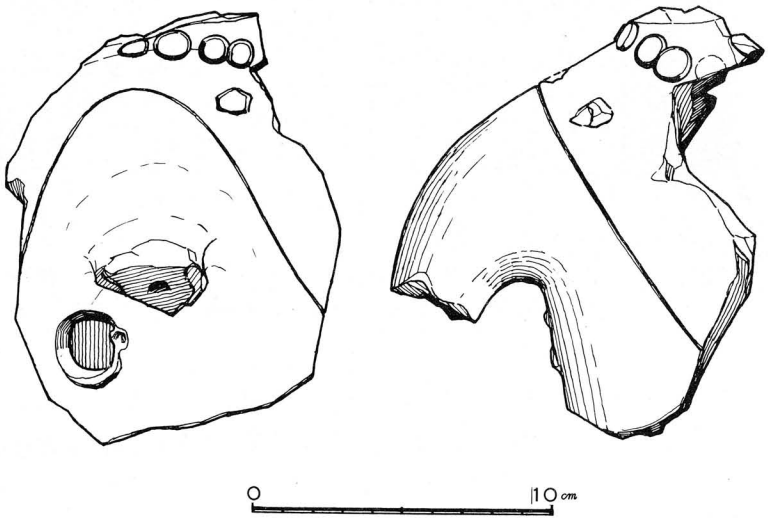
また、羨道部においては、高さ70cm、長さ3.2mを計るこぶし大から人頭大の石が残り、閉塞設備のあったことを確認し、特にこの部分において、多数の須恵器片や大型の甕片を検出している。



第18図　山畑36号墳石室実測図($\frac{1}{80}$)

一方、削り取られた墳丘の断面において、円筒埴輪片が出土したため、墳丘上に長さ3.6m、巾1.5mのトレンチを設定した。

この結果、9本の円筒埴輪がほぼ一直線上に並べられていることが判った。各々の埴輪は底部をほとんど同一の平面に約2cmの間隔をおいて並べられていたが、埴輪列はN－33°－Eの方位を示し、石室の中心線とは平行せず、53°の違いが認められた。またこれらの埴輪列は石室床面より72cm上部にあり石室を構築するためにうがった土坑の南北ラインから埴輪列南端まで2m、北端で1.2mを測るため、当埴輪列が36号墳に伴うものであった場合には、墳丘の築成過程において円筒埴輪をならべ、さらに盛土を行って墳丘内に埋めたものと考えられる。石室の中心線と同筒埴輪列が平行あるいは石室中心に対し弧状に配列されていない点に疑問は残るが、埴輪そのものは、平均底径13.7cm　厚さ1.5cm、復原高約40cm前後の著しく退化した末期的手法である点から、後期古墳における埴輪のあり方を示す重要な資料といえる。なお、また本古墳の南側から人物埴輪の胴部を採集しており、（第19図）また最近、H支群の5号墳の墳丘内でも埴輪片を採集したが、合せて後期古墳における埴輪の存在・意義に注目する必要があろう。



第19図　人物埴輪実測図

F．山畑22号墳の調査

第20図　古墳全景

山畑22号墳は、E支群の比較的上部、標高約114mを測る地点にあり、東西に主軸を置く双円墳である。現在西丘とその石室が残るだけで、東丘の上半及び石室は破壊されて見られない。

墳丘は、西丘で高さ4.5m、径20mを測り、復原主軸長約30mを測るものと思われる。

西丘の石室は、左片袖式で、奥壁巾1.45m、玄室長3.38m、高さ1.76mを測り、羨道は玄門部巾1.0m、入口部巾1.5m、長さ6.42m、高さ1.6mを測る。玄室のみの大きさでは、小型の石室の類に含まれるが、羨道部を含めると9.8mと比較的長い。調査は、本古墳北側のD支群38・39・40号墳の調査と合せて実施した。

西丘石室は、玄室部のみ50～20cm大の自然石を雑然と敷いているが奥半部はやや小型の石材で占められ、前半部は比較的平面をそろえて敷き、羨道部との間に約30cmの段を作っている。

本石室への埋葬は2次に亘るものと考えられる。すなわち、玄室内敷石中央に人骨片がかたまって遺存し、近くから子持勾玉(1)が出土した。また奥壁・東壁にそって、須恵器坩(3)・鉄鏃(2)・馬具轡(1)・鉄斧(1)を副葬しており、敷石中央部で刀の円頭部を検出した。

また、玄室の袖部には、須恵器・土師器の一群があり、須恵器高坏(5)、瑞(1)・坏蓋身(1)・土師器坩(1)・椀(1)、から成っている。また玄室西壁ぞいに鉄釘が多く第一次の埋葬は木棺を使用し袖部の土器を伴うものであろう。

また先の袖部土器群と東壁に接して台付の装飾壺が上下別々に置かれていた。装飾壺は、通有の広口壺の肩部に計4つ(現在2つのみ残る)の小型壺を付け、各壺間に「イノシシと犬、馬を引く人、鹿、3人の男」の各像を作っている。類例としては兵庫県西宮山古墳出土例に近い。

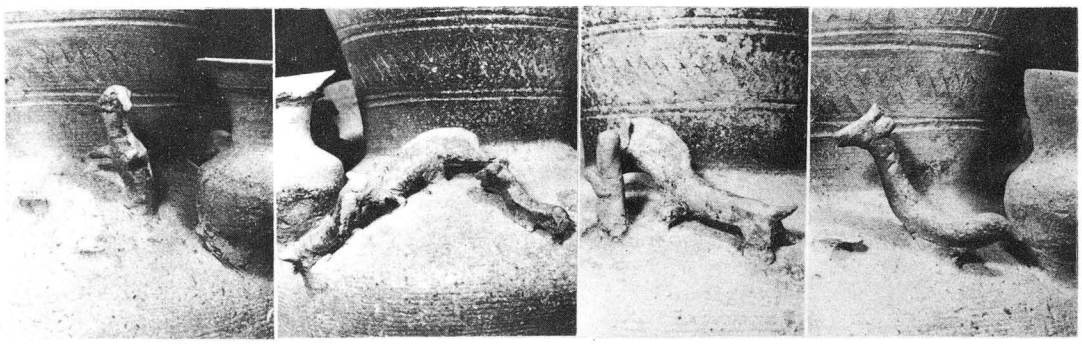
さて、羨道部では、第2次の埋葬が行なわれ、羨道奥半部に直刀(1)、須恵器坏(3)・長頸壺(1)・高坏(1)・耳環(1)・鉄釘を人骨と共に検出しており、第2次埋葬も木棺で行なわれたことを示している。

第1次埋葬に伴う土器と、第2次埋葬のものとの形式差は1形式あり、6世紀末～7世紀初頭の間に埋葬が2度行なわれたことを示している。

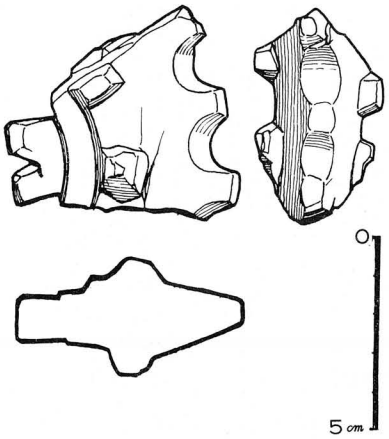
第8表　山畑22号墳の出土遺物

埋葬の区分	場所	埋葬の主体	副葬品				
			装身具	馬具	武器	土器	
						須恵器	土師器
第1次埋葬	玄室中央部	木棺 (鉄釘)	子持勾玉(1)	轡(1)	束頭(1) 鉄鏃(3) 鉄斧(1)	坩(2) 坏蓋身(1) 高坏(5) 瑞(1) 装飾付壺(1)	短頸壺(1) 椀(1)
第2次埋葬	羨道奥半部	木棺 (鉄釘)	金環(1)		直刀(1)	高坏(1) 坏蓋(1) 長頸壺(1) 坩(1) 坏身(1)	

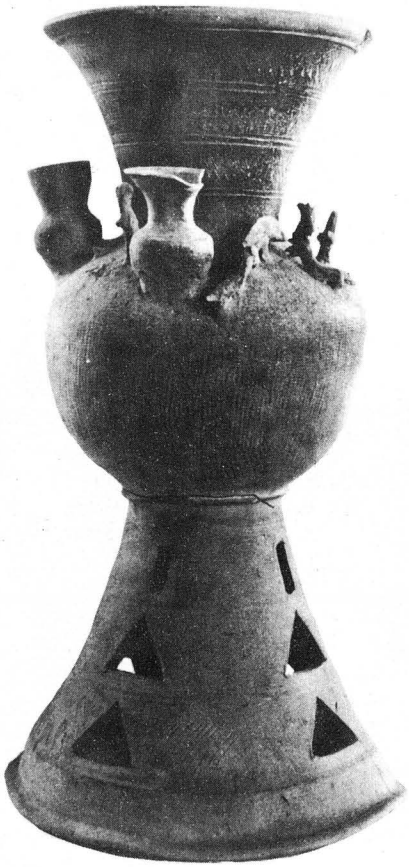
第21図　装飾壺の動物と人物像



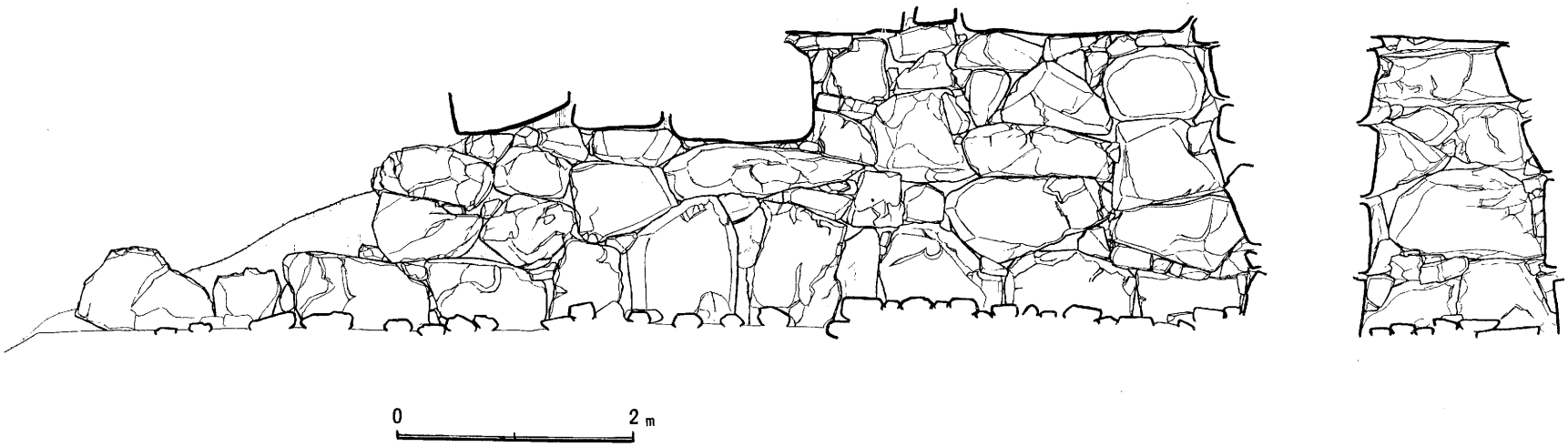
東丘部については、昭和26年、所有者が異ったため、大半の破壊を受け、墳丘・石室については知るすべがないが、本調査では、一応墳丘中央に当たる南斜面にトレンチを設定し、石室の遺存状態を調査したが、50～100cm大の自然石が雑然としており、石室は全く壊滅したものと考えられる。なお、トレンチ南端で、耳環(1)、焼成不良の須恵器甕片が若干出土している。



第22図　子持勾玉



第23図　装　飾　壺



第23図　山畑22号墳石室実測図（$\frac{1}{80}$）

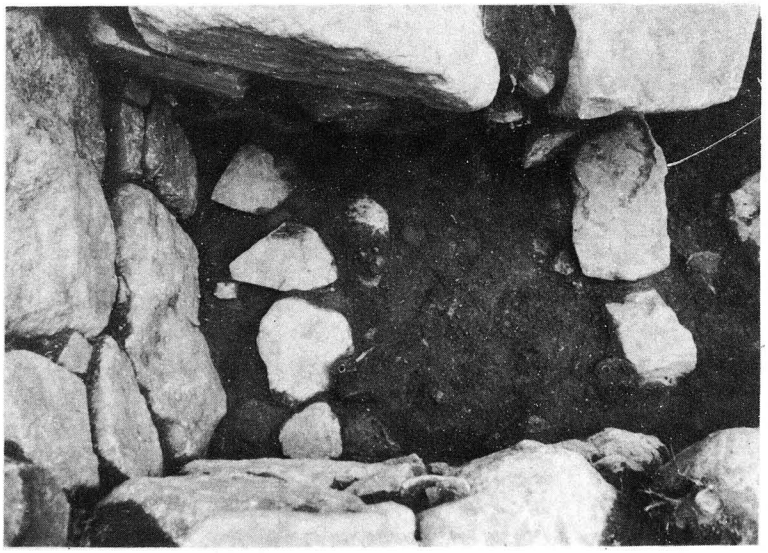
G．山畑38・39・40号墳の調査

各古墳は、E支群22号墳北側約10mに東西にならぶD支群東端の古墳で、東より38～40号墳と並んでいるが、39号墳のみ古墳列より南へ少しとび出た状態にある。

各古墳とも10m未満の小円墳で、古墳列の北側は15～30mで客坊谷筋で立地は良くない。

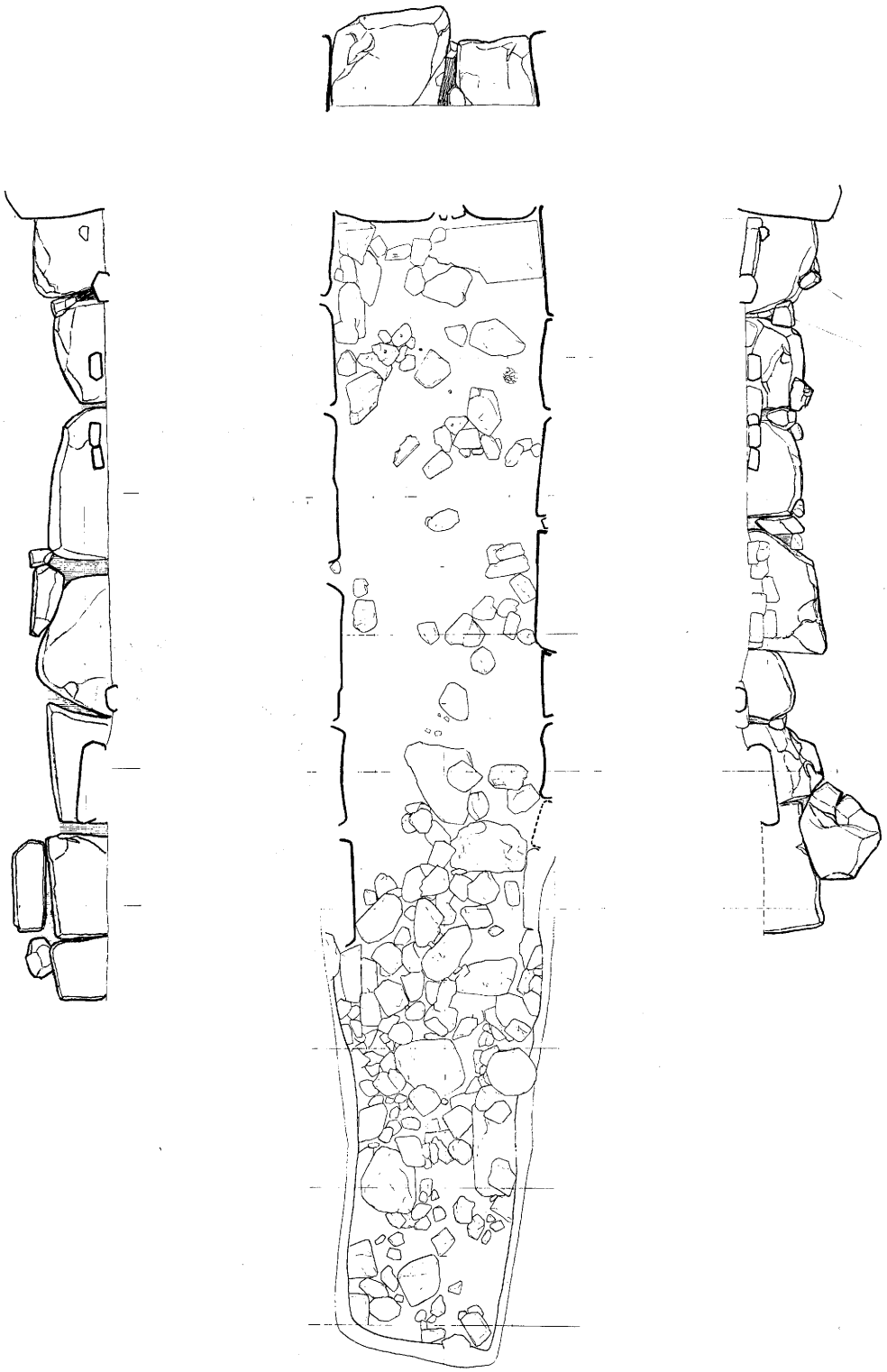
古墳間は1～4mを測るのみで非常に接近している。

第25図　山畑40号墳の棺台

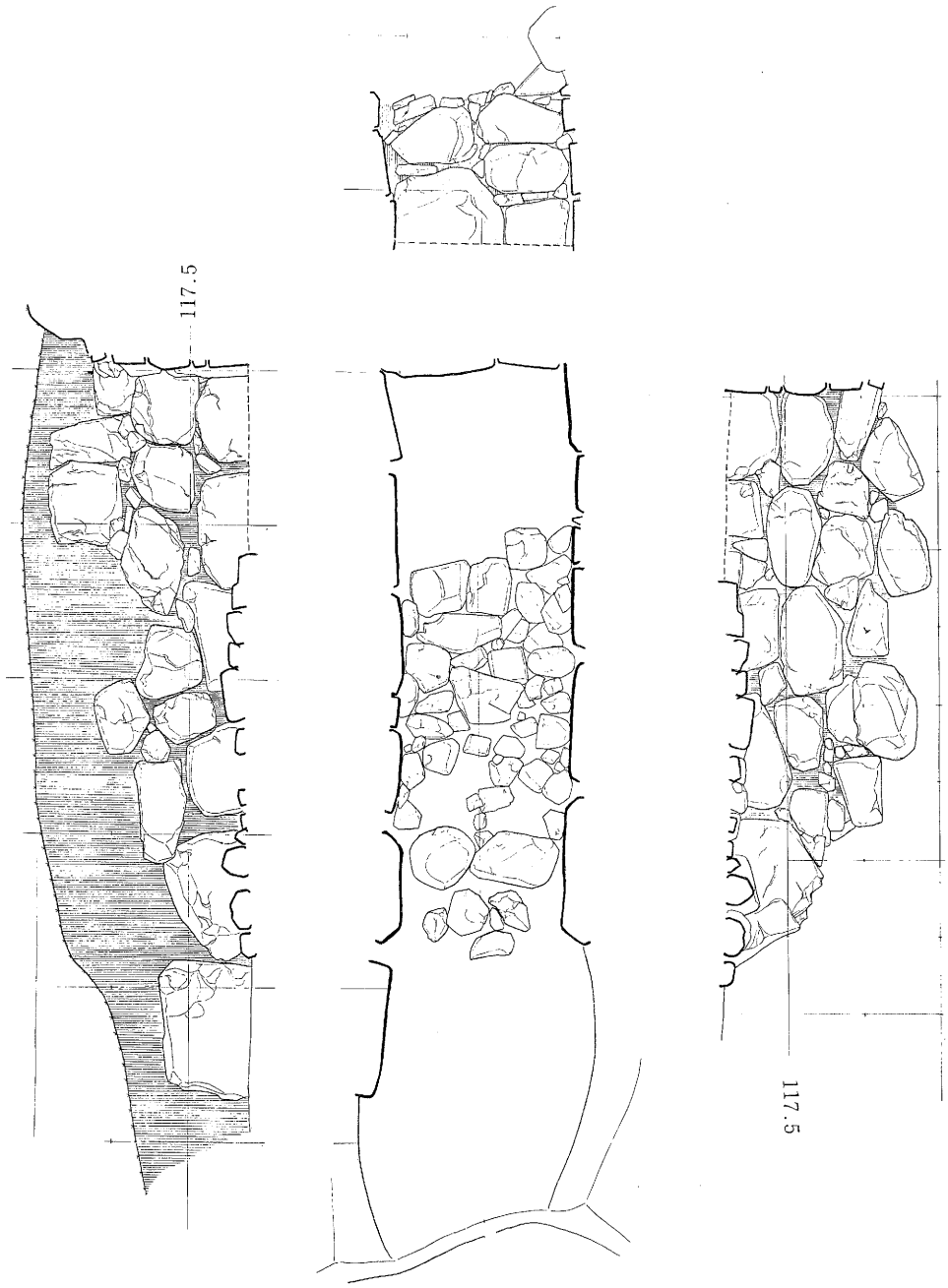


38号墳は、径11.0m、高さ2.5mを測り、基底部を残して大半の石材は搬出されている。石室は、奥壁巾1.5m、長さ5.25m、入口巾1.25mを測る無袖式の石室で、入口部は10～40cm大の石材が充満した状態で残り、石室内には埋葬当時をしのぶ遺物はほとんどなく、わずか奥壁に接して凝灰岩製組合式家形石棺の石材1枚が残っていただけで、他は石棺片が散乱していることを知り得たのみである。

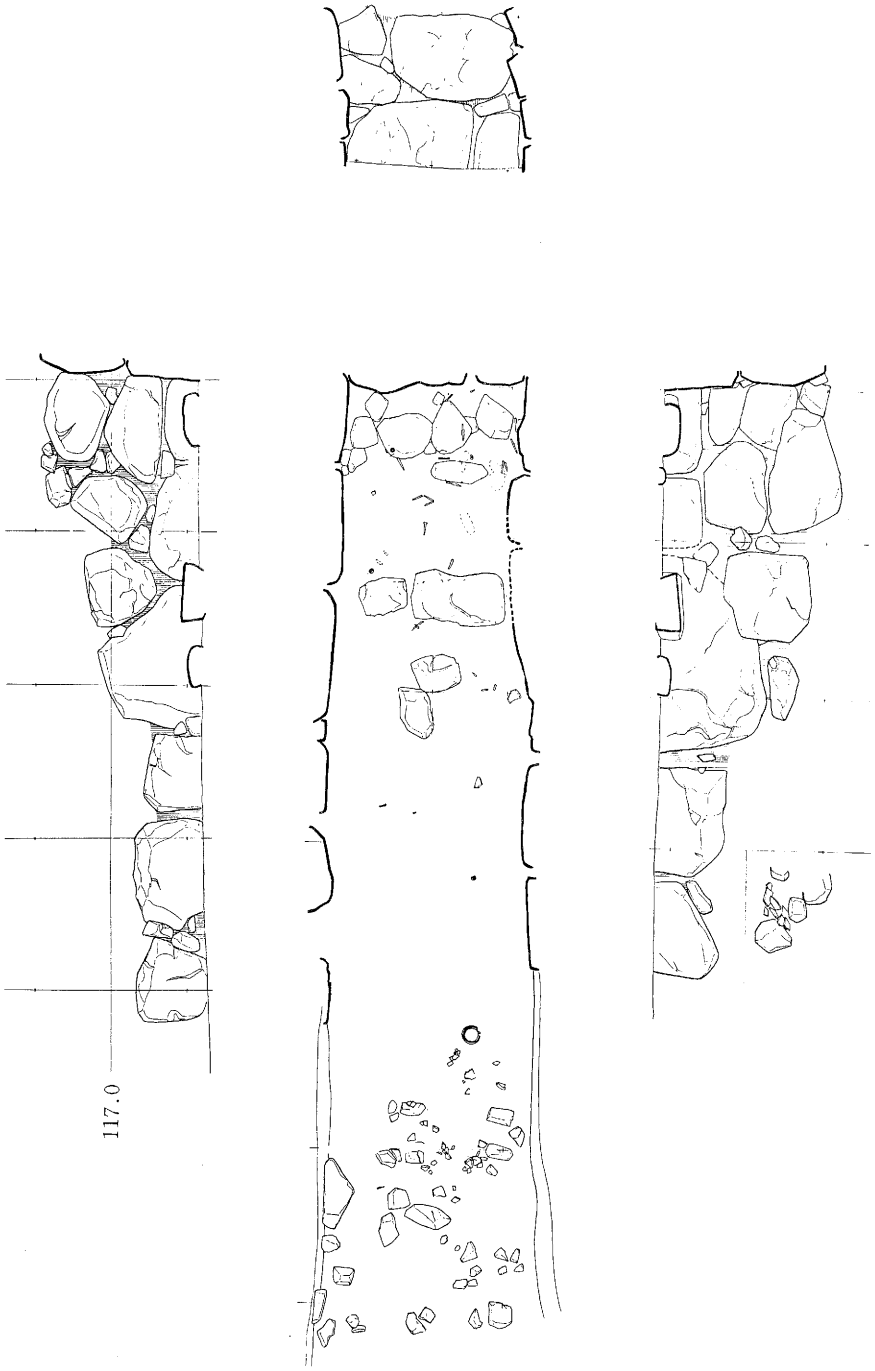
39号墳も径8.0m、高さ1.5mを測る小古墳で、内部の石室は、38号墳同様無袖式で、奥壁巾1.2m、入口巾1.05m、長さ4.65mを測る。3壁に亘って2～3段の高さに残っているのみである。



第26図　山畑38号墳石室実測図（$\frac{1}{50}$）



第27図　山畑39号墳石室実測図(1/50)



第28図　山畑40号墳石室実測図($\frac{1}{50}$)

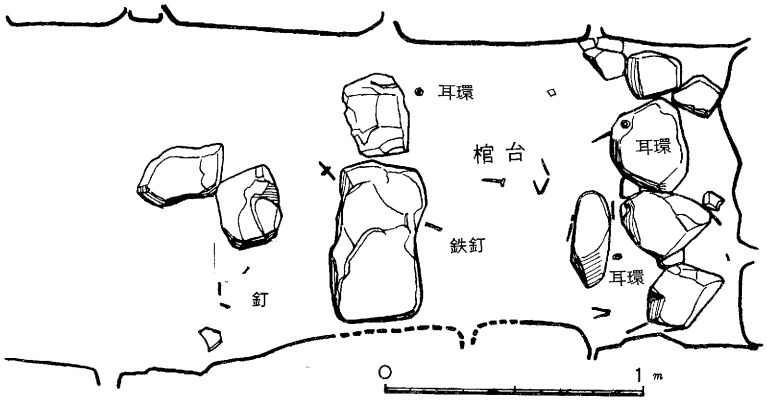
石室床面には30～20cm大の石が敷かれているが、奥半部は、すでにめくられた状態にあった。埋葬状態を示すものはほとんどなく、敷石中央で金環(1)鉄釘若干、土師器破片を検出するにとどまった。

39号墳の西北にほとんど接して構築されている40号墳は、墳丘・石室内とも比較的良好に遺存した。

墳丘は、径11.0m、高さ2.0mを測り、西への傾斜面に築造されているため、東ではほとんど封土のもり上りはなく、西半部のみ墳丘の形態をよく残している。

石室は、無袖式の石室で、奥壁巾1.15m、入口巾1.33m、長さ4.20mを測る。石室内における遺物遺存状態は他の石室より良く、石室の奥半部には、棺台の設備を作っている。棺台は、B支群の35号墳の場合と同様に、比較的細長い石材を前後に石室主軸に対して直交据置している。附近には人骨片が散在して、棺台内部で鉄釘と耳環(3)外部で耳環(1)があり、本古墳の様に最も小型石室の内にも計2体の埋葬=(同一の小型木棺による埋葬)が行なわれたことを示している。石室巾からすると木棺2棺は並列出来ず、埋葬が前後した

第29図　山畑40号墳の棺台と遺物



とするならば、後の埋葬は先の棺に収納されたことも考えられる。なお、石室入口部に若干の須恵器坏(1)・高坏片、土師器片が出土した。時期は7世紀初頭のものと出来る。また、東壁入口部の封土中内に須恵器の甕片がまとまって出土した。山畑古墳群の南の姫田塚古墳でも石室入口附近の墳丘内から須恵器大甕、平瓶が出土している。

III　埋葬と遺物

今回調査した古墳は、比較的埋葬当時の状態あるいは副葬品をよく残したものが多かったが、ここでは各古墳における埋葬別の副葬品の内、土器を中心に図化・配列した。

B支群の山畑33号墳では、玄室から羨門部にかけて4次にわたる埋葬が見られたが、第1次埋葬及び第3次埋葬に伴う土器群は比較的埋葬の時間差が少いことを示しており、第1次埋葬に伴った馬具杏葉（表紙カット）および土器の形式から6世紀中葉を若干下る時期に古墳の築造・埋葬が行なわれたことを示している。第4次埋葬に伴う土器群は比較的時期の下るもので、約半世紀以上たった7世紀中葉に追葬が行なわれたようである。ただ第2次埋葬では、一棺内に2体分の耳環が残り、この間に同棺へ追葬されたものと考えられる。閉塞部で出土した土器群は各時期のものがあり、各々の埋葬後の祭祀に伴うものであろう。

山畑35号墳も3次の埋葬が行なわれていたが、第1次埋葬と第2次埋葬の土器群は、極めて近く、山畑33号墳の埋葬時とほぼ同時期に埋葬が行なわれているが、羨道入口部の第3次埋葬に伴う瑞は作りが良くなく6世紀末ごろの追葬とみられる。

4次の埋葬が知られたE支群の山畑25号墳は、玄室部の第1・2次埋葬の土器群の内、須恵器坏・高坏等に見られる様に1形式の差があり、第1次埋葬は6世紀後半も中ごろに行なわれ、続いて7世紀初頭前後に第2次埋葬が行なわれている。これに続く第3次埋葬に伴う長頸壺は先の土器群に近く、続いて埋葬が行なわれ、羨道入口部の第4次埋葬の副葬品はないが、少なくとも7世紀の中葉に近い時期へ下るものと考えられる。

また、同支群の山畑22号墳西石室では、2次の埋葬が知られたが、玄室内の第1次埋葬に伴う装飾付壺をはじめとする奥壁部・羨門部の土器群は、6世紀後半も中ごろのもので、羨道部の第2次埋葬の土器群は、底部が平担で小型の坏に見られる様に7世紀初頭の追葬と考えられる。

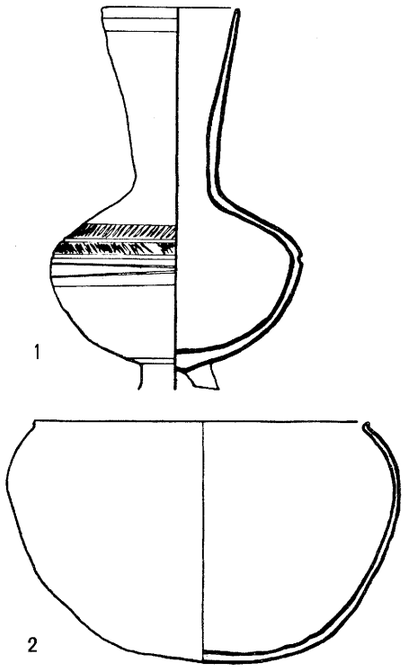
円筒埴輪列を検出した山畑36号墳は、石室内の埋葬状態がよくなかったが、土器群は6世紀後半も中頃のものと見られ、埴輪列も同時期のものであろう。

D支群の山畑38～40号墳は、ほとんど遺物を残していなかったが、10m未満という古墳の規模等からしてむしろ埋葬に伴う副葬品をほとんど持たない古墳といえる。中でも40号墳は、石室奥半部に棺台を設け、周辺より2体分の耳環を検出しており、1棺へ2次の埋葬が行なわれた可能性があるが出土品として須恵器坏身等があり、形式から見て、7世紀初頭のものと見られ、本古墳群でも最も後に築造されたものであることが知られる。

第30図　山畑33号墳出土遺物

第1次埋葬

土器



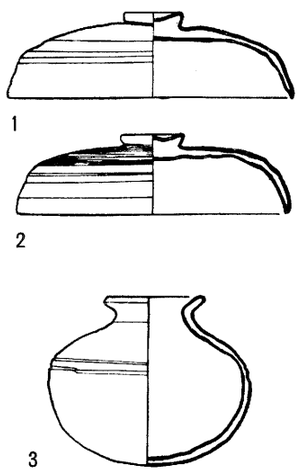
特長

1．脚付長頸壺　比較的均整のとれた長頸壺で脚部の大半を欠いているが、口径8.1cm、胴径14.8cm、高さ21.5cm（現高22.5）を測る。焼成は良好でわずかの灰色の自然釉が付着、一部に窯片がついている。脚部中央に２本の凹線に挟まれて右下りの平行クシ目文を付け、さらに上部に左下りの斜行線文をつけている。

2．鉢（土師器）　口径19.4cm、高さ14.2cmを測り、比較的薄手で赤褐色の良質の胎土を用いている、口縁部は若干内傾している。

第3次埋葬

土器



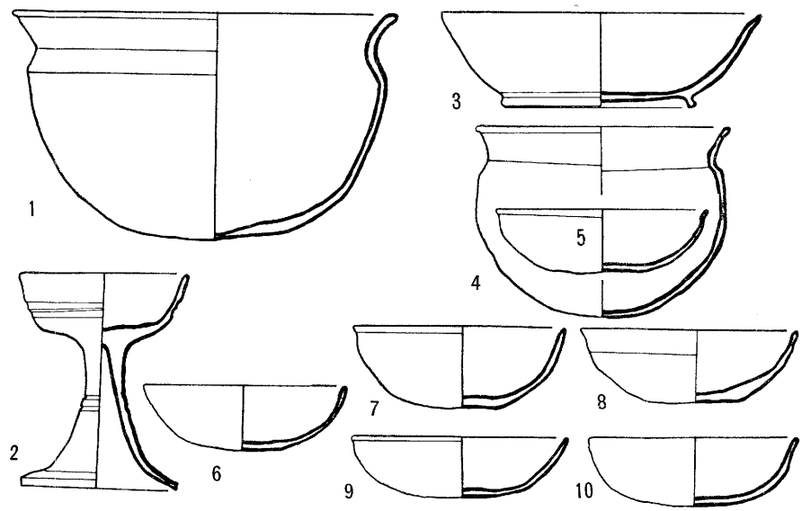
特長

1．2．坏蓋　口径17.0cm、高さ4.2cmの蓋に径3.6cmの比較的大きく上部の凹んだつまみを付けている、手法・焼成は共通。

3．壺　口径6.0cm、高さ10.0cm、短く大きな外反する口縁部を持ち、胴部中央に２本の凹線をつけている、内外とも整形はていねいで、器壁はほぼ一定である。

第4次埋葬

土器



特長

1．鉢（土師器）　口径22.9cm、高さ13.5cm口縁部は大きく外反させている。

2．無蓋高坏　口径10.3cm、高さ13.0cm黒色に近く釉が全体に付着している。坏部中央および脚部中央に各々２本の凹線を付けている、整形はていねいに行なっている。

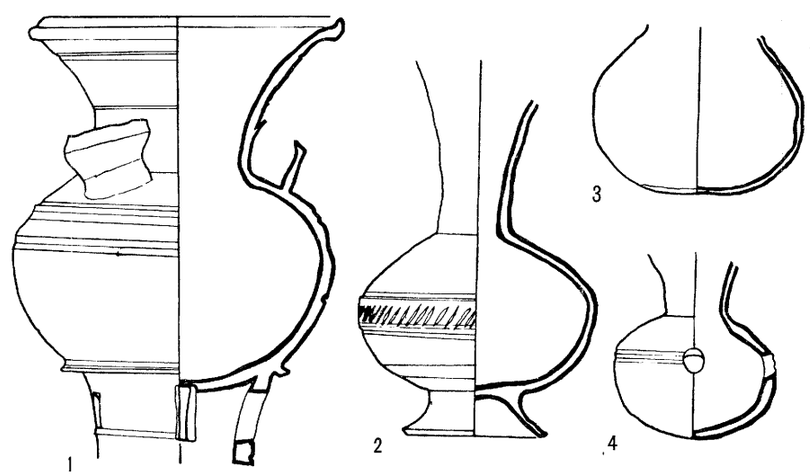
3．台付鉢（土師器）　口径18.7cm、高さ5.7cm、を測り、径11.5cmの高台を付けている。内外ともヘラで細かく整形しているが、表面の剥落が激しい、黄褐色、全体として作りは良い。

4．鉢（土師器）　口径15.0cm、高さ11.3cm、茶褐色を呈し、部分的に赤褐色一部にススが付着し、内外ともヘラで磨かれていたようであるが磨滅がひどい、器壁は比較的薄い。

5～10．皿（土師器）　口径12.2～12.8cm、高さ3.8～4.5cm。

羨道部及び閉塞部

土器



特長

1．子持脚付壺　脚部を欠いているが、口径18.5cm、現高26.5cm（壺高22.2cm）胴径19.0cmを測る。口縁部は大きく開き、その端を内へつまんでいる。頸部は波状文を付け、胴肩部には小型壺（復原高約６cm、胴径５cm）を計４コを装飾的に付けている。壺部と脚部の間は一本の凸帯に成形している。

2．台付長頸壺　口縁部を欠いているが、胴径14.5cm、現高21.3cmを測る、壺下部に径8.6cmの高台状の台をつけている。胴部中央には２本の凹線に挟まれた斜位の平行ヘラ刻文を付けている。胴上部には比較的細く、やや大きく口の開いた頸部をつけている。

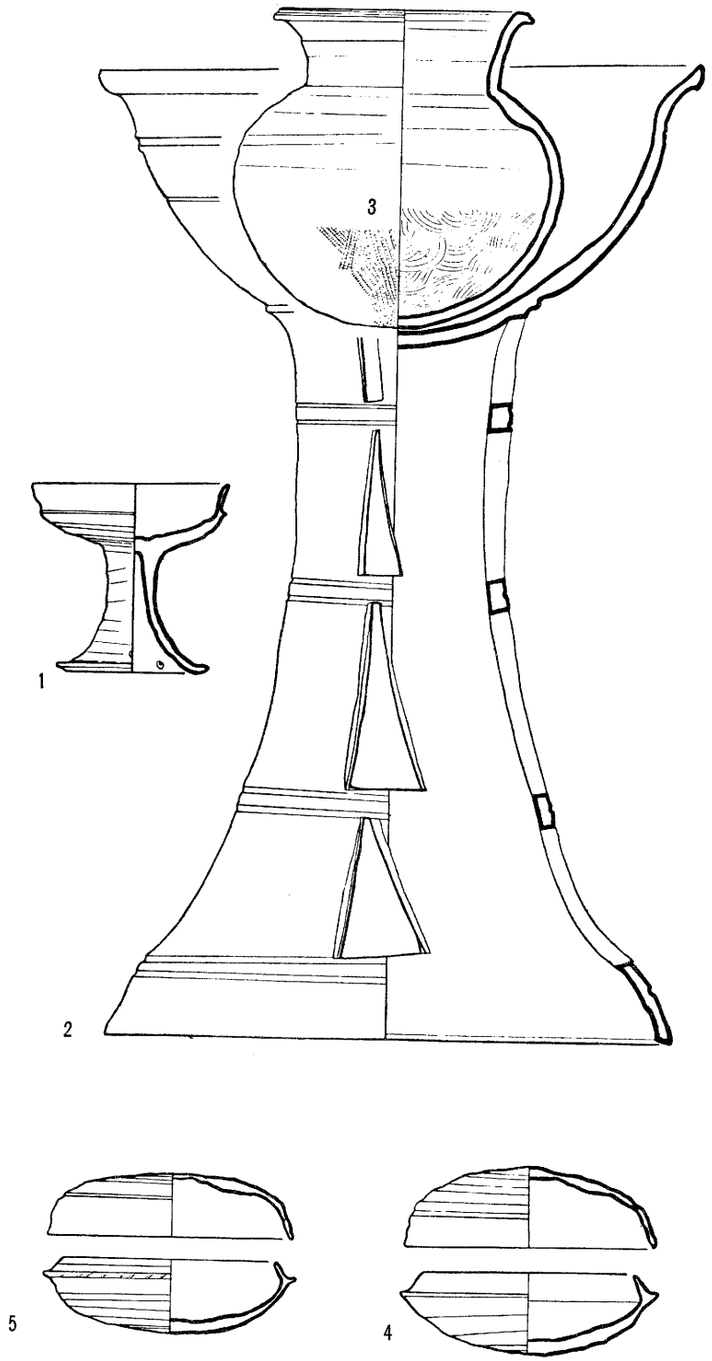
3．壺（土師器）　口縁部を欠いているが、胴径12.3cm、現高9.5cmを測る、茶褐色を呈し、内外とも全体にヘラで整形しているが、一部に指痕が残る、頸部は直線的に外反するやや長い形式のものであろう。

4．甕　口縁部を欠いているが、胴径9.6cm、現高11.0cmを測る、比較的小さな円孔を胴部にあけている。

第31図　山畑35号墳出土遺物

第1次埋葬

土器



特長

1．**無蓋高坏** 高さ10.8、口径11.3cmを測る通有の無蓋高坏で、脚には透しを作っていない。比較的高温で焼成されているため全体に黒色に近い灰釉付着、器形の整形はていねいに行ない、坏部のヘラケズリ、脚部のしぼり上げが明瞭に残る。脚部端は外へつまみ出しており、周囲に2孔の円孔をあけている。

2．**大型器台** 高さ56.4cm、口径35.2cm、底形32.8cmを測る、脚部は上から下まで4段の透しを施しているが、最上段のみ長方形で他は長三角形のものである。全体に整形はていねいに行なっているが、焼成は余りよくない。

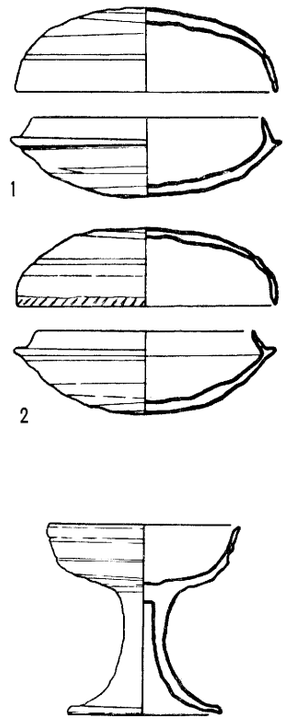
3．**壺** 口径15.2cm、高さ18.4cmを計る。球形に近い胴部に対しやや外反する高さ9.5cmの口縁部をつけている。焼成は余りよくなく全体は淡灰色を呈している。胴上部より口縁部にかけてハケ目による整形を行ない、胴部の⅓下半部は格子目のタタキ文、裏面は同心円状にあて木痕を残す。

4．**坏蓋身** 蓋口径14.4cm、高さ4.5cm、坏口径12.3cm（14.9cm）、高さ4.8cm共に焼成良行、蓋の外面はヘラケズリでていねいに整形しているが、内面は凹凸があり、全体として器壁は一定でない。口縁内部の端はわずかな段を作っている、蓋は口縁部のたち上りが45°に近く器内外とも整形は良好で、外面のヘラケズリはていねいに行なっている。

5．**坏蓋身** 蓋は口径14.2cm、高さ3.7cmをはかり、口縁部は比較的内傾している。坏は口径12.4cm（14.7cm）、高さ4.3を測る。共に焼成・整形は良好で、坏身の蓋受部の周囲にヘラによる斜位の刻文（約6mm）をつけている。

第2次埋葬

土器



特長

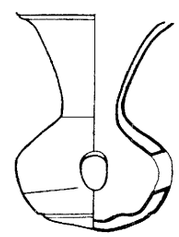
1．**坏蓋身** 蓋口径15.0cm、高さ4.9cm、焼成良好、青灰色、坏は口径13.3cm、高さ4.6cm淡青灰色、比較的器壁が厚いが蓋受け部はていねいにつくり、器下半部のヘラケズリも大きくけずっている。

2．**坏蓋身** 蓋は口径15.1cm、高さ4.5cmを測り、口縁近くまで一定のカーブを持っているが、口縁端はわずかの凹線で区別している。口縁端外面はヘラを押しつけて刻目状の文様をつけている。蓋は口径12.5cm（15.0cm）、高さ4.7cmを測る。わずかの灰釉が認められ、器内は指で整形し、外面はヘラケズリがていねいである。

3．**無蓋高坏** 口径11.0cm、高さ11.0cmを測る、均整のとれた無蓋高坏である。高温で焼成されており、全体に黒色に近い灰釉が認められる。（横位に焼成）整形はていねいで、脚部端はわずかに外へ段をつけて再び端を内へひねっており、第1次埋葬の高坏と若干手法が異なるが、全体として非常に近い。

第3次埋葬

土器



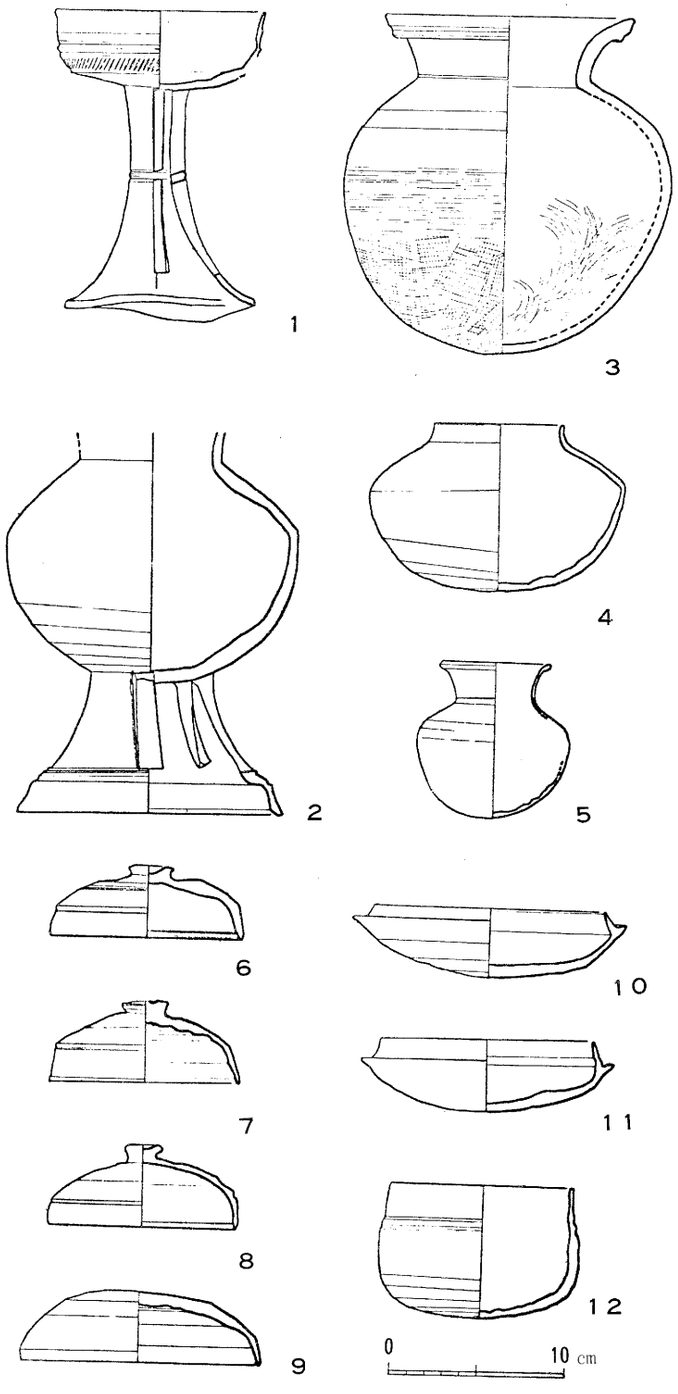
特長

1 **瑞** 口縁部を欠いているが、胴径9.0cm、現高12.7cmを測る、焼成は余り良くなく灰色を呈する。脚部の整形は荒っぽくいびつである、胴部の円孔は大きい。

第32図　山畑25号墳出土遺物

第1次埋葬

土器



特長

1．無蓋高坏　口径12.1cm、高さ17.0cm、底径10.9cmを測る完形品、脚部に2段の長方形透しを持つ長脚、坏部には斜行の櫛目文を付けている、焼成は良く暗灰色を呈している、脚部はねじれを起こしている。

2．脚付長頸壺　完形で出土したが盗掘のため口縁部破損、比較的大型の長頸壺で、胴径16.7cm、脚底径15.2cm、現高22.0cmを測る、脚部には1段の長方形の透しを入れ、脚端は比較的薄く内へ段を以ってまげている。

3．壺　口径14.3cm、胴径18.8cm、高さ19.5cmを測る、焼成はあまり良くなく灰白色を呈している、胴下半部にはタタキ文を残し、全体の器形のひずみはない。

4．坩　口径7.5cm、胴径14.7cm、高さ9.5cmを測る、器壁は薄く焼成は普通である、底部のヘラケズリは粗っぽい。

5．小型壺　口径6.3cm、胴径8.8cm、高さ9.0cmを測る小型の壺で、全体の器壁を薄く整形も良い、焼成は良好で青灰色を呈する、外面はハケと指ナデにより整形している、一部に窯片付着。

6～8．蓋（子持高坏）　口径11.0cm、高さ4.6cmを測り、上部に径2.6cmのつまみを付けている、通有の蓋にしては器高があり、小型でもあるので子持高坏等の蓋と考えられる、焼成良好、暗灰色。

9．坏蓋　口径13.6cm、高さ4.1cm、10の坏身とセットで出土。

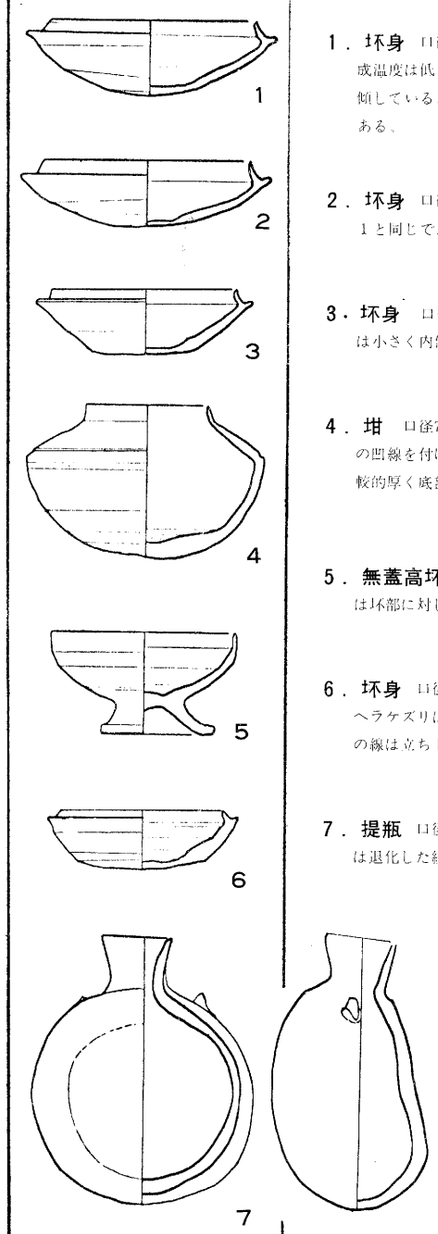
10．坏身　口径12.3cm、高さ4.0cm。

11．坏身　口径12.2cm、高さ4.2cmを測る、比較的立ち上がりがあり、やや深みの坏身である。

12．コップ型土器　口径10.5cm、胴径11.5cm、高さ7.8cmを測る、胴上部に2本の凹線を付け、口は胴より少し狭い、下部のヘラケズリはていねいに行なっているが、口縁近くの内外面はごつごつして整形は良くない。

第2次埋葬

土器



特長

1．坏身　口径12.0（14.6cm）、高さ4.3cmを測る、焼成温度は低く、灰白色、立ち上りは比較的小さく内傾している、底部は丸く、ヘラケズリはていねいである。

2．坏身　口径12.0cm（14.5cm）、高さ3.8cm、手法焼成は1と同じで、同一窯のものである。

3．坏身　口径10.8cm、高さ3.8cmを測る小型の坏、立ち上りは小さく内傾、底部は平担。

4．坩　口径7.1cm、胴径13.8cm、高さ8.7cm、脚上部に1本の凹線を付け胴下部へのカーブを作っている、器壁は比較的厚く底部の整形は良くない。

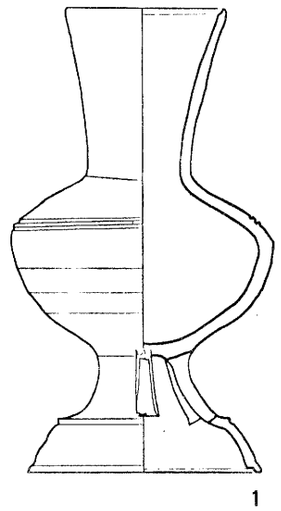
5．無蓋高坏　口径11.8cm、高さ5.8cm、脚径6.6cm、脚部は坏部に対し、いがんで付けられている。

6．坏身　口径9.3cm、高さ3.4cmを測る小型の坏で、外面のヘラケズリは粗っぽいため、肉厚で底面から蓋受けまでの線は立ち上っている。

7．提瓶　口径4.0cm、高さ15.2cm、胴径12.6cm、胴上部には退化した紐かけ突起が左右についている。

第4次埋葬

土器

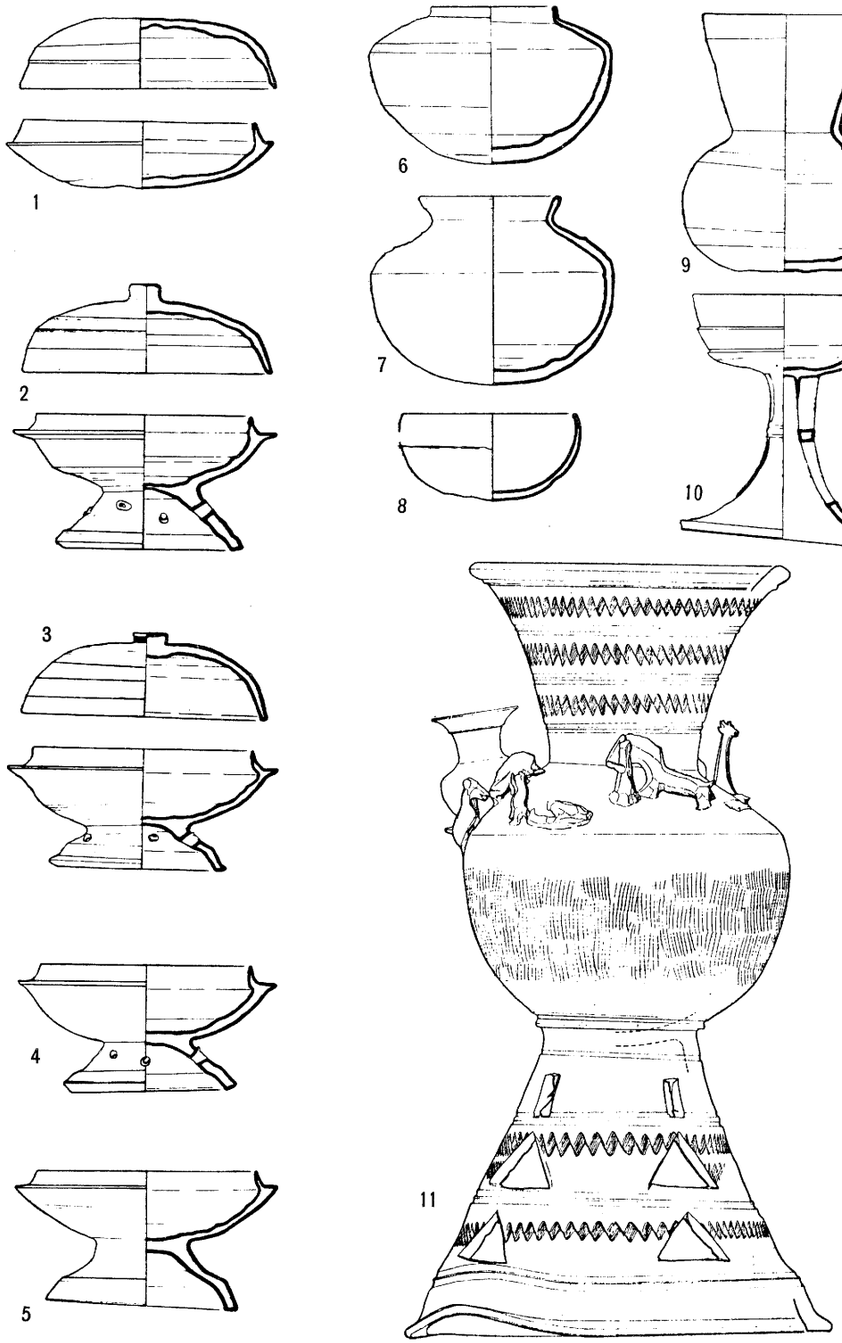


1．脚付長頸壺　口径9.2cm、高さ26.3cm、胴径15.2cm、脚底径13.4cm、比較的焼成・整形は良く青灰色を呈し、器外面の仕上げはていねいである、胴上部に2本の凹線をつけ、開いた脚部中央に段をつけている、長方形の1段透し。

第33図　山畑22号墳出土遺物

第1次埋葬

土器



特長

1．坏蓋身 蓋は口径15.0cm、高さ4.2cmを測る。焼成は良好で青灰色～灰色を呈する。器壁は均一ではなく、上部内面は回転指整形により凹凸が激しい。外面のヘラケズリは巧みに行なっているが少しいびつである。身は口径13.9cm、高さ4.1cmを測り、灰色～暗灰色を呈する。成形がいびつであるが、内外のヘラケズリ・ナデ整形がていねいである。

2・3・4・5　有蓋高坏 蓋は口径14.4cm、高さ5.1cmを測る。上部に径2.0cmの比較的棒状のつまみをつけている、高坏は口径15.3、高さ8.2cmを測る短脚の高坏で、脚部は内部から円孔3をあけている。整形は共に良いが、焼成温度が低いため乳灰色を呈している。

他の高坏・蓋は、胎土・焼成・手法とも同様で同一窯で焼成されている、5のみ脚部の円孔はない。

6．坩 口径8.2cm、高さ11.4cm、胴径14.1cmを測る、器内及び外面胴上部に多量の自然釉と窯片が付着している、胴下部はヘラケズリの後ナデで丸く仕上げている。

8．碗(土師器) 口径10.1cm、高さ5.2cmを測る、口縁部は若干内傾し、1.5cmの粘土帯を積み上げて痕跡が残っている、底部は凹凸があり整形はよくないが、内面はていねいに仕上げている。

9．短頸壺(土師器) 口径9.7cm、高さ15.6cm、胴径12.0cmを測る、全体に赤褐色を呈し、胴部はいびつで底部に凸帯状のものを一部残している、外面は全体に細かく横位のヘラミガキを行っている。

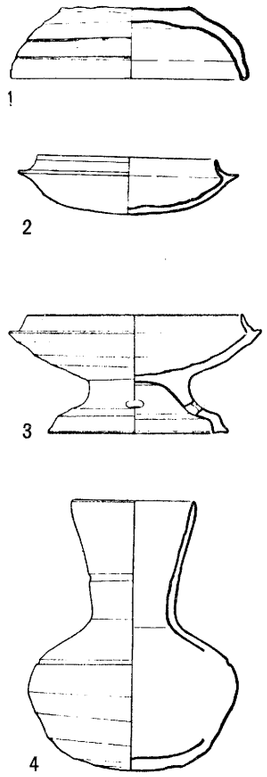
10．無蓋高坏 口径11.7cm、高さ15.4cm、脚径12.1cmを測る、坏部は2本の段をつけ脚部の端は素縁となっている、上下2段の透しをつけているが、下段は右側の縦の切り込みがあるのみである。器体は上部を少し斜めにして焼成されており、全体の整形は良い。

11．装飾付壺 口径19.1cm、胴径19.5cm、高さ27.5cmを測るやや口の狭い広口壺に高さ18.5cm、底径25.2cmの脚を付けている（総高46.10cm）、壺頸部には3段の変形波状文を付け、胴下半部は格子目状のタタキ文を残している、壺肩部には、小型の壺4を配していた様であるが、現在、小型の瑞（1）と長頸壺（1）を残すのみである、各小型壺の間には、比較的具象的に4単位の群像を付けている、

各像は右まわりに、犬・イノシシ・犬－人物（男）・馬－鹿（2）－人物（男3？）が表現されている、脚部は3段の透しを施し、上1段目は長方形、下2段は三角形の透しである、各段には壺部と同じように変形波状文を施している、整形・焼成は良好で、壺上半に若干の自然釉が付着している。

第2次埋葬

土器



特長

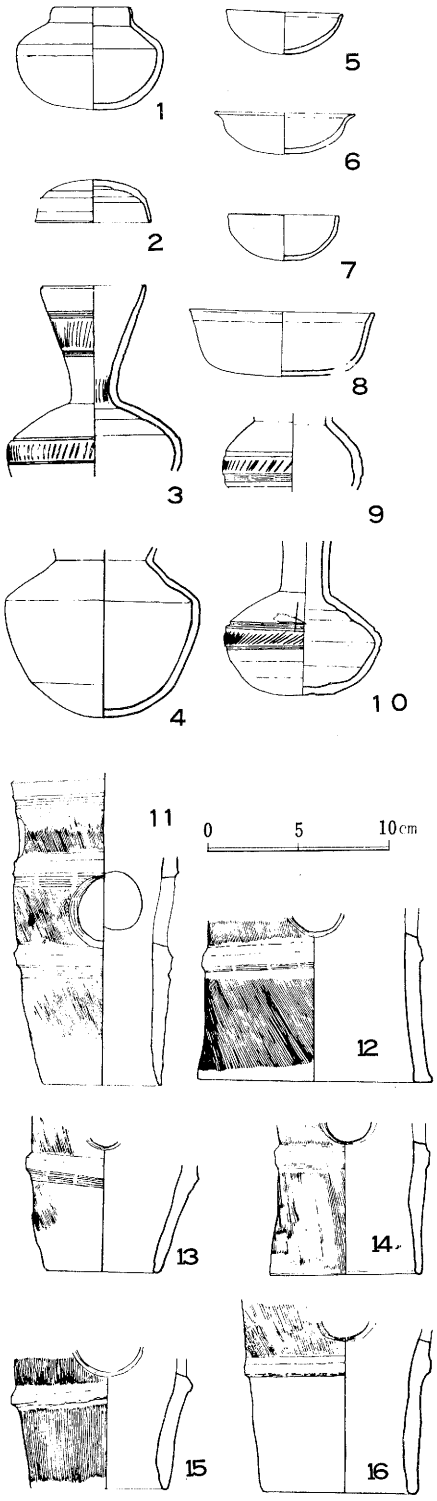
1．坏蓋 口径14.1cm、高さ4.3cmを測る、灰色～灰白色、口縁内面に2条の凹線を入れ、内外とも指ナデによる整形がていねいである、上部はヘラケズリを行なわず、径7.8cmの未整形部を残している。

2．坏身 口径10.5cm、高さ3.5cmを測る、青灰色を呈し、焼成は良い、やや小型の坏で底部は、平担に近く中央までヘラケズリを行なっている。小石混入、整形良好。

3．有蓋高坏 第1次埋葬の有蓋高坏と近いが、手法の点ではおとる。口径12.9cm、高さ7.1cmを測る。胎土は悪く、焼成も不良で灰～灰白色を呈している、口縁部の立ち上りや受け部をはじめ脚部の接合は良くない、脚部には3つの円孔を穿っているが、外面の円孔周囲は打ちかいた状態にある。

4．長頸壺 口径7.5cm、高さ16.1cm、胴径12.5cmを測る長頸壺で灰色～灰白色を呈し、焼成は良くない、頸部・胴部に各1条の凹線をつけ、底部に×印のカマ印を有する。口縁端は若干内傾させている。

第34図　山畑36号墳出土遺物一覧表

土器類	特長
	**1．坩** 口径7.6cm、胴径14.5cm、高さ10.0cm、口縁部は端で若干内へまげている。 **2．蓋** 口径11.5cm、高さ4.1cmを測る蓋で、全体として器高があり、坩等の蓋として使用されていたものと思われる。 **3．長頸壺** 口径5.1cm、胴径9.8cmをはかり、大きく開いた口をつけている、頸部・胴部に左下りの　目状文をつけている。 **4．広口壺** **5．碗(土師器)** 口径11.5cm、高さ4.1 cm、口縁端は外へわずかにつまんでいる。赤褐色。 **6．皿(土師器)** 口径14.0cm、高さ4.1cmをはかり、口縁は外へ少しつまんで外反している。一部に黒斑がみられ、底部はヘラミガキ整形、赤褐色、内面上部はヨコ位、下面はタテ位のヘラミガキ。 **7．碗(土師器)** 口径11.0cm、高さ4.5cm赤褐色、ヘラミガキによる整形。 **8．浅鉢(土師器)** 口径18.3cm、高さ6.2cm、やや大型の浅鉢で、底部は平担、口縁部は端で少し外へつまんでいる。内面には、わずかの凹線的手法を加えている。 **9．長頸壺** **10．長頸壺** 胴径15.5cm、現高15cm、脚部を故意にけずり取っている、胴中央に記号文的なヘラ文様をつけている。 **11～16．円筒埴輪** 比較的粗っぽい作りで、11のみ凸帯が3段目まで残り、8～9cmの単位で凸帯が付けられている。全体に縦位の八ヶで整形し、2段目・3段目に径7cm位の円孔をあけている、色調は黄褐色、　11…現高30cm、上部径16.5cm、底径11.8cm 12……やや大型　底径23.0cm・現高17.0cm 13……上部径17.0cm、現高15.0cm、底径11.5cm 14……　〃　15.0cm、〃　15.0cm、〃　15.0cm 15……　〃　17.0cm、〃　12.5cm、〃　13.5cm 16……　〃　19.0cm、〃　12.0cm、〃　19.0cm

Ⅳ　まとめ

古代大和政権の所在した大和と生駒山地を挟んで隣接し、西日本、あるいは水運により大陸への門戸として重要な位置を占めた河内国は、大和川・淀川の両河川によって形成されたデルタ地帯であり、弥生時代中期以降、水稲生産力の発展を基として、平野部への集落進出・拡大は目ざましいものがあり、瓜生堂遺跡・瓜破遺跡・船橋遺跡等の大集落を生む一方、山麓にそって多くの集落を連立させている。こうした弥生時代の生産的背景のもとに4世紀以降、大和への玄関であり、河内の中心地域である現在の柏原市周辺の丘上には玉手山古墳群・松岳山古墳群等、前期の古墳群を成立させた。これに対し、生駒山地の西麓にあたる現在の大東・東大阪・八尾の各市周辺は、「和名抄」によれば、北より讃良郡・河内郡・若江郡・高安郡に当っていたが、特に河内郡の北半から讃良郡の区域にかけては、当時なおデルタ地帯の形成が遅れ、難波の入江のなごりである湖沼状の低湿地が広範囲に残り、周辺の生産地帯は低湿地と山地に挟まれた区域に限定されていたと考えられる。

当地における古墳の初現は、比較的安定した生産地帯を持つ高安郡域に西の山古墳・花崗山古墳など60～70m級の前方後円墳を以って始まり、在地の有力首長が河内・高安・若江の三郡を中心に君臨していたものと考えられ、さらに5世紀前半の周濠を有する心合寺山古墳へと続いている。

山畑古墳群の含まれる河内郡にあっては、4～5世紀前半の古墳は見られず、扇状地の末端に北より、塚山古墳・芝山古墳・えの木塚古墳・大賀世古墳など直径30～40m級の円墳や古式の横穴式石室を有する小型の前方後円墳が5世紀中～後半期にかけて出現しており、南の高安郡でも、これまでの4～5世紀前半期の古墳群と離れ、古式の横穴式石室を持つ郡川東塚・西塚古墳等の古墳の出現がみられ、これまでの在地有力首長にとどまっていた古墳の造営が小地域に台頭してきた有力首長にも及びこれまでの周辺地域への支配形態が変質してきたことを示している。しかし河内郡内に4基、高安郡に2基の差が見られ、各々の小地域の共同体の規模・構成に相異があることを示している様でもある。中でも、古式の横穴式石室を有し豊富な金銅製品等を有する芝山古墳や郡川西塚・東塚の存在は、大和政権の対外交渉の上に重要な役割を果した官僚的人物が登場していることも十分考えられる。

この間、平野部の生産拡大や大陸より導入された種々の手工業生産は、これらの小地域有力首長のもとに競って進められ、小若江・衣摺・西岩田・友井東遺跡等の様に村落経営が進められたものと考えられる。

この様な中に、河内郡では6世紀の初頭に山畑古墳群や一部の地域で、また高安郡ではほぼ同様な時期に群集墳の形成が始まっている。

山畑古墳群は、畿内特に大和・河内地方に数多く分布する群集墳の中では中規模の群集墳であり、高安郡の大型群集墳とは形成の相様を若干異にしている。山畑古墳群ではA支群の双円墳でやや大型の瓢箪山古墳が群集墳に先立って扇状地末端に築造され、6世紀の中ごろにB支群として盛行していくのに対して、高安群集墳では、

同時期に既に扇状地上部に小型の円墳として築かれていくという差がみられる

こうした差は、群集墳を構成する生産集団の中で生産拡大に努め生長しつつあった有力家父長家族がこれまで共同体を掌把した地域的有力首長を通して大和政権拡大の上に果した政治的・生産的な貢献度の差と見ることも出来よう。

山畑古墳群は、6世紀の後半に盛行を見、その時点で平均して10基以上からなる数支群の形成がみられる。「和名抄」には、河内郡の郷として、大戸・額田・豊浦・大宅・桜井・新居・英多の7つをのせ、新居・英多をのぞいてこれらは北から南へ山麓に沿ってならんでいたものと考えられるが、南北6kmをはかるこれら5郷内に、10基程度からなる小群集墳が13ヶ所認められ、各々の群集墳は、各々の郷の村落を経営した家父長家族とみられ山畑古墳群とその形成消滅を同じくしている。特に後になって郡衙及び河内寺(河内直一族)の造営される大宅郷周辺に山畑古墳群や客坊山古墳群等100基を超える後期古墳が築造されていることは、周辺が同郡内の中心的位置を占めていたことを示している。

これに対し、大戸郷にあたる石切町周辺では、7世紀の前半から形成を見る墓尾古墳群やイノラムキ古墳等が存在し、続いて火葬骨壺や土製墓誌板を伴う火葬墓が多く見られ、周辺の群集墳の消滅あるいは追葬が終止する段階に新しい発展を見ていることは興味深い。さて、今回調査した各古墳における埋葬の在り方は、当時の葬制およびその背景にある社会構成を考える上に十分な成果があった。

6世紀の中葉を若干下る時期に築造され、中型の石室を有するB支群33号墳では、7世紀の前半に至る間、4次（計5人）の埋葬を行っていた。第1次埋葬では精巧に大陸製品を模したと考えられる金銅製杏葉（5）・直刀、第3次埋葬でも大刀(1)などを有しているのに対して、小型の石室を持つ山畑35号墳では、埋葬は全て棺台を作り、木棺による3次の埋葬を行い、直刀・鉄斧・鉇などの工具類を有していることでは33号墳と極めて対照的であり、B支群を形成した家族集団間の階層差を示している。

また、盛行期の後半に属し、6世紀後半後葉の築造と考えられるE支群25号墳では、小型で狭長な石室内に4次（4人）の埋葬が考えられ、第1次・2次埋葬が木棺を使用し、石室前半部の第3次・4次埋葬は、凝灰岩製組合式石棺を使用するという棺材の差が認められるが、第1～2次埋葬の副葬品の知れる所では、直刀・轡・刀子を持ち、他には特に目立った副葬品はなく、小型の石室内にも整然と追葬の区画を設定している点興味深い。

また、同支群の中心的位置を示めると考えられる双円墳の22号墳西丘石室では、6世紀後半後葉～7世紀初頭にかけて2次の埋葬を行っており、各々直刀を有していたと見られ、第1次埋葬では轡・鉄斧や子持勾玉が人骨片に接して出土している。また本古墳群では唯一の装飾壺の副葬などの点から特殊な地位にあった家父長家族を想定する必要があろう。また、北側に位置するD支群38～42号墳等小型古墳の一群は、石室・遺物などから見て最末期の7世紀初頭の築造と見られ、22号墳をとりまくように近接していることは興味深く、有力な家父長家族に属する弱少家族集団を示すものと見られる。これらの小古墳においても、40号墳の様に木棺内に2体を収納している。

この様に、今回の調査例では、6世紀中葉～7世紀の初頭にかけて、群集墳の盛行期を中心に築造された古墳では、石室の大小にかかわらず、1～4回の追葬を行ない、大小家族における埋葬の在り方を明らかにすることが出来た。埋葬は石室入口部ないしは閉塞に至る空間を十分利用し、棺を整然と配置することが基本であったと見られる。最終の追葬は各古墳によって当然異なるが、33号墳の4次埋葬は、7世紀中葉に下るものと見られ、各古墳とも石室内が棺で充満する時点で終止している。

これに対し、同郡内の大戸郷に含まれると考えられる本市石切町所在の大籔古墳の埋葬例の様に、6世紀末の築造と考えられる石室内に7体の追葬人骨を2つの石棺に改葬し整理された空間になお追葬を行い、計11体の埋葬が見られるという様な特異な埋葬方法は見られず、むしろ当古墳の周辺地域に新しく7世紀前半に入って、陶棺墳の墓尾古墳群や割石1段積みのイノラムキ古墳などの古墳が築造され、引き続いて墓誌板を伴う火葬墓、骨壺等の発見が目立つなど、7世紀の周辺地域の発展を考慮に入れるならば、6世紀末～7世紀前半にかけて強化されていく前律令的支配の中に変質あるいは新しく台頭しつつあった在地有力家族集団の特殊な過程を背景に考える必要があろう。

この様な同郡内の不均等な発展は、山畑古墳群を形成したこれまでの在地家族集団に強い打撃を与えることになったことは十分考えられるが、墳丘形態・遺物の上で若干特殊性がみられる本古墳群の盛行・消滅は、さらに古墳造営の主体であった家族集団の背後に接続する大きな氏族集団の盛滅をも考慮する必要があるように思われる。

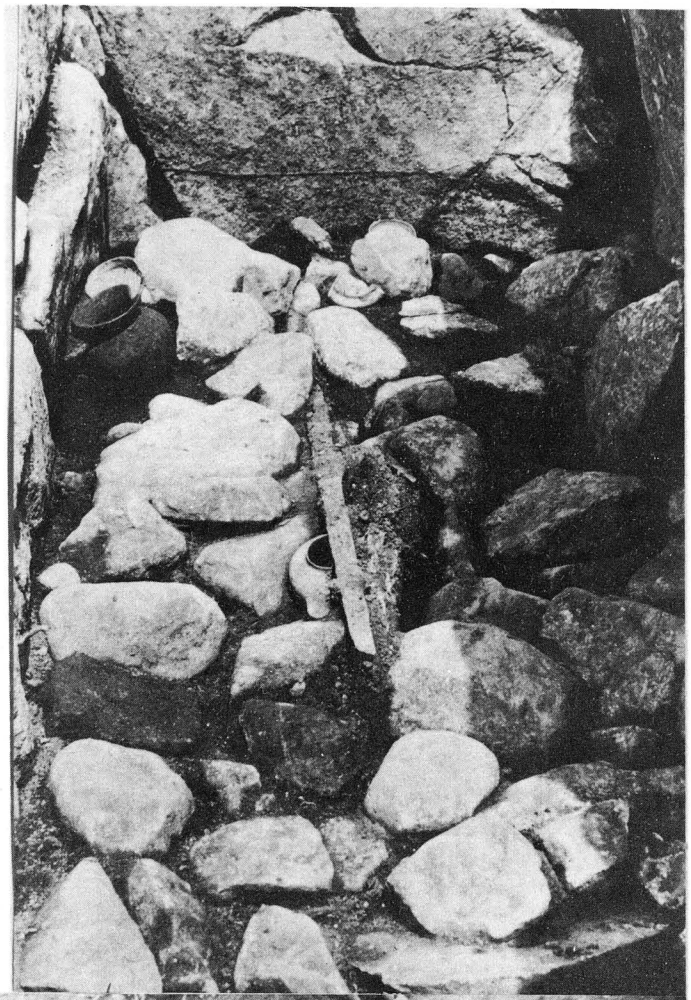
図版１　山畑33号墳の埋葬状態

図版２　山畑33号墳石室全景

図版３　山畑35号墳石室全景

図版4　山畑35号墳の棺台

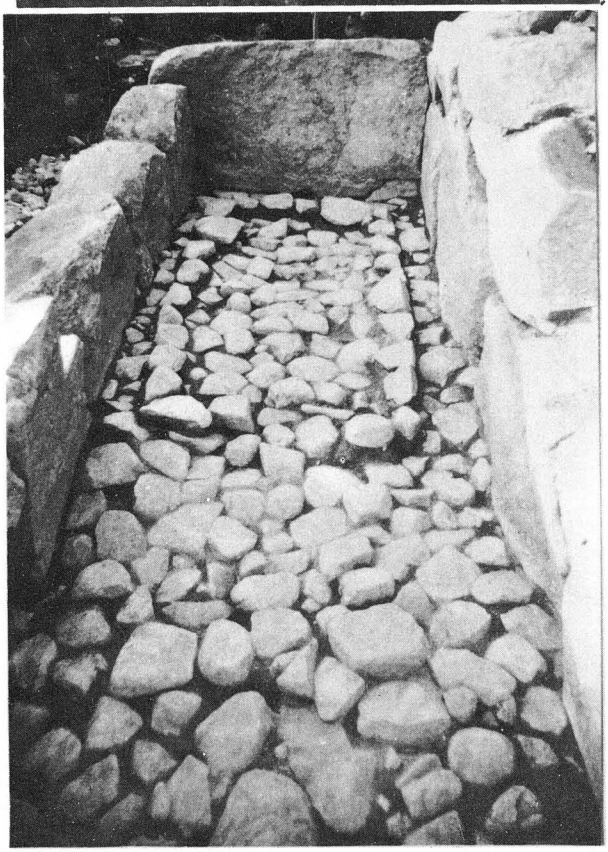
図版５　山畑25号墳第１次埋葬



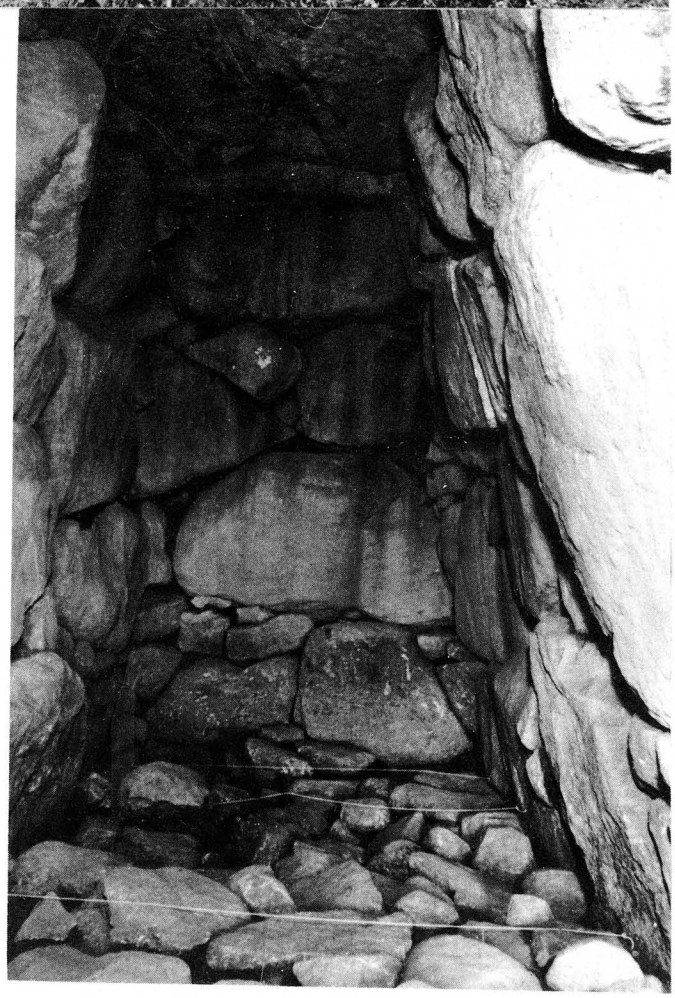
図版６　第４次埋葬の石棺

図版７　山畑26号墳石室全景奥壁より入口

図版８　棺台と敷石の状態

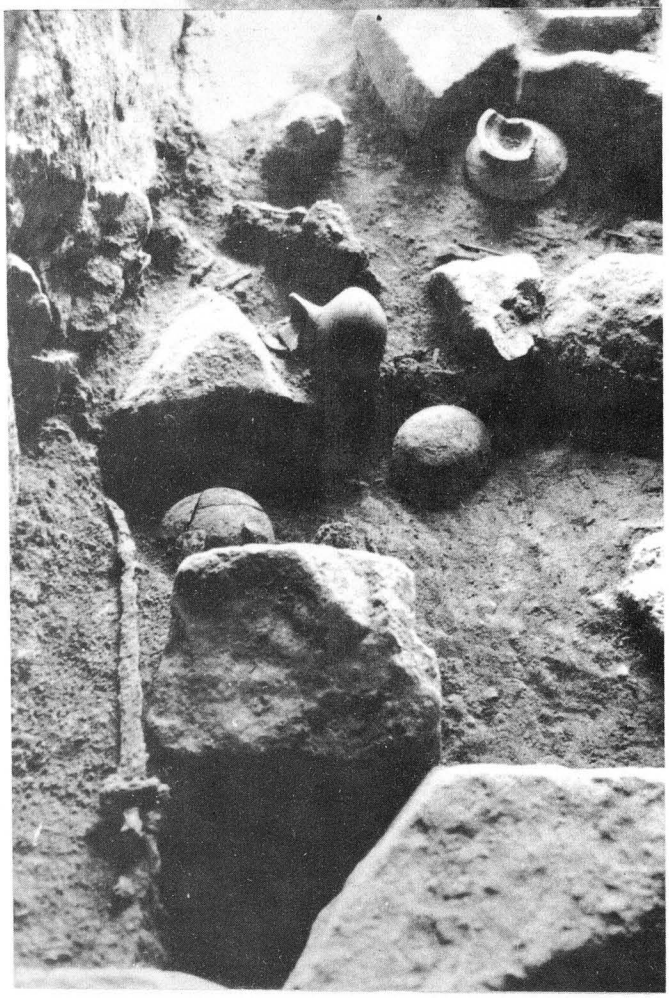


図版９　山畑22号墳全景



図版10　西丘の石室

図版11　第１次埋葬袖部の土器群



図版12　第２次埋葬

図版13　山畑39号墳全景

図版14　山畑40号墳全景